
囚

ケニーD

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

囚

【Nコード】

N2870X

【作者名】

ケニード

【あらすじ】

我が娘を奴隷とすること、自身の幸福のために他者を殺めることの正義、そして人々の幸福の在処とは。 囚が第一部（2006年以前）、未掲載が第二部（2007年以前）、凶が第三部となります。

陽の昇りと小鳥の羽ばたき、そして草木の揺らぎが目の奥に浮かび、次第に色づいてゆく。どれも淡く、本物にはほど遠かった。その色彩は目覚めへの合図のようなもので、きつかけとなるのは小鳥のさえずりを聴かせる小さな目覚まし時計だ。頭で自然を感じて身体を起こし、いつも煙草を一本吸ってから店を開ける準備をした。外に出ると、朝の天気に応じていつも小菅の気分は左右され、今日はとても気持ちのよい、問いかけるような風と白む空が、頭にこびりついていた眠気をほじくるようにして奪いさつてくれた。こうやって自然が生き物の眠気をかき集めて、十分にたまったのなら、ようやく夜になるんじゃないかね、と小菅はなんとなしに考えた。

店のシャッターをあげ、夜中のうちに業者に搬入されている菓子や雑貨、飲料と伝票とを確認していると、家内が台所で昼の弁当を作る音が聞こえた。チキンカツや煮物といった簡単なものではないけれど、手作り弁当ということで客の評判はよかった。商売のうえで目玉商品はやっぱり必要で、一応はこれが目玉といえるのだと思う。

店の整理を済ませ、レジカウンターの裏側から居間に首だけをのぞかせてみると、眠たそうにする娘がパジャマ姿で口をもごもごさせながら歯をみがいていた。

「歯みがき粉が垂れて畳が汚れるじゃないか」というと、娘は言葉にならない返事をし、洗面所へと戻っていった。

「もうすぐ時間だから早くしなさい」

娘は高校二年生で、当然学業があるものの、小遣い稼ぎにアルバイトがしたいというものだから、登校前の早朝の一時間と夕方の三時間を小菅のもとで働かせていた。他でアルバイトをさせるよりよっぽど安心できる。しかしその分、時給は少しばかり高くしていたのだけだ。娘の容姿的かわいさというのはいつの間にか、

同じ風景を見続けているかのようにして麻痺し、わからなくなっていて、小さかった娘を両手で抱きかかえた頃のような幸せに満ちた感情もなかった。しかし、娘が、ふと若かりしときの家内を思い出させるような、遠くを憂いとともに眺めるような表情を見せたときには、小菅は家内をそつと見つめたり、昔を思い浮かべたりもした。そしてそんな娘には、どうやら色々な虫がつくよう、男子生徒にとつては少しばかり人気があるのだろうとも思えた。目の届く場所で働かせていても、ファンらしき客は今までに数人いたのだ。父親が店にいようと、堂々と近づいてくる者もいたのだから、遠くで働かせるのはほんとうに、夜道を歩かせるより恐ろしいことだ、と小菅は考えていた。

娘は、男の子に興味なんてない、油絵を描くので精一杯だ、といっているものの、いつ心がわりするかもしれず、小菅は最近では自分でも気づかぬうちに客をにらみつけていることもあった。そんなときは、なんて嫌な人間なのだろう、と自己嫌悪もしたのだけれど、結局は同じことのくり返しでしかなかった。しかし、看板娘、という点でいえば、娘はその任をよく果たしているようにも考えられた。娘がレジカウンターに立つ朝の一時間のあいだ、小菅は店内をのぞける居間に戻り、軽く朝食をとりながら新聞を煙草の煙で黄色く染まるかと思えるほど読み続ける。結局、新聞を読んだところで、小菅の生活になんらかの変化があったかという、なにもなかった。身内が殺されたとか、罪を犯したとか、そういう話もとくになく、今ではもう、選挙にも興味がなくなっていて、世の中の動きを知るといふことは大切なのだろうけれど、しかし、それを知ったところで意見を交わす相手も今はこれといっておらず、小菅はただの小さな商人だった。なのになぜ読むのか、それは、「世の中のこと、なにも知らないのね」と娘に馬鹿にされないようにする、ただそれだけのためだ。いつか娘に勉強を教えてくれといわれたときのために、高校時代以来あけていなかった教科書を、こつそりと何度か読みふけたこともある。そのおかげで威厳は失われることもなかった。

今まで、いや、今も小菅は家族と平穩に過ごすこと以外になにも興味がない。オリンピックやマラソンやなにかしらの勝負を見て、人がなぜあれほど熱狂的になれるのか不思議でならなかった。そして、虚構のドラマを見てなぜ涙を流すのか、虚構だからこそ安心して涙を流せるのかもしれないのだけれど、それでも小菅にはそのことも理解ができなかったのだ。

ふと、小菅は考えた。私はいつ喜び、いつ涙を流しただろうか、と。そのことがさしあたって重要ではないということと、そして今、最も重要なのは、娘に蠅が近づいていることだ、ということ、娘になれなれしく話しかける男の声で判断した。その声の主は毎朝決まってこの時間帯にくる、娘と同じ高校に通う男で、小菅は名前を知りたいと思つたこともない。毎度、パンと紙パックの牛乳なんてものを購入しているらしく、まったく健康的に思えた。小菅はそつとぞく。

「今日こそ一緒に登校したいんだけど」

ほんの少し髪を茶色に染めて、目をいっぱい輝かせている少年の口調はたどたどしいようでもあった。

「駄目よ。いつも来てくれて嬉しいけど、駄目なものは駄目。あたし、忙しいんだから」

「そんなつれないこといわないでさ、頼むよ」

「もうっ。こんなところで牛乳なんて買わずにさ、大人ぶってカクテルでも飲むほうがいいんじゃない」

「……それって、軟派ってこと？」

小菅は笑わずにはいられなかった。もちろん、声には出さずひっそりと。初めて詳しく話の内容まで聞いてしまったのだけれど、娘は以外としつかり者のようで、牛乳を飲み続けるような軟弱で不健全な男にはたぶらかされることもないような気がした。「今日こそ」という言葉から推察するに、なんだか娘にアタックしているのかもしれない、その点でいえば、彼は軟弱にあらず、なかなか熱い男なのかもしれない。

「あたしはね、だれとも付き合う気はないの。だから学校で好きとかいうのもやめてくれないかしら。遊んだりするのは嫌いじゃないから友達ならいいっていつてるでしょ？ 誤解されるから二人きりってというのが嫌なだけよ」

「じゃあ、こんど遊ぼうじゃないか。友達を誘うよ」

「今は忙しいからそういう話はまた学校でね。いつまでもここにいたらあたしの父さんが怒るかもしれないわよ。とつても怖いんだから」

「見たことあるよ、ちつとも怖くなんてないね」

「あら、いうのね。でも案外そのとおりかもね」

小菅はそばに置いてあった娘用の手鏡を唸るように見た。少しばかり目つきを強張らせてみたものの、とくに恐ろしさもなく、なんとなく、そんなことをしてしまった自分に照れた。お客を怖がらせるような顔じゃなくてよかったよ、自分をそうやって納得させ、少年が帰ると、「今日はやけに話したようだな」と、居間から足を伸ばし、サンダルを履きながら娘にいった。

「席替えして席が離れたからかしら」

「授業中にも喋っているのか？」

「そんなわけないでしょ。彼なりに、遠くにいった感覚でもあったんじゃないかしら」

「若い者の心はよくわからんね」

「あら、まるでいきなり歳をとって生まれたかのようないいかたじやない」

「そうかもしれないな。さあ、もう学校の準備の時間だぞ」

そういつて店番を交代し、のんびりと客の相手をするのだった。

しばらくもすると着替えを済ませた娘がブレザーの制服姿で私のもとへやってき、「どう？ おかしいところはない？」とふわりと舞って見せる。「いつもと同じさ。べつにおかしくもなんともない」というと、「もうっ」と少しだけふくれて今度は家内のもとへ行き、同じようにたずねる。これは毎日のことで、感覚の麻痺している小

菅には、やはり答えようもなく、それに、「綺麗だよ」などと恥ずかしいことを嘘でもいえるわけもなかった。「嘘でも嬉しい」などと女は喜んでみせることがあるけれど、そんな心はまったくいい加減で、もしかすると、「嘘でも嬉しい」という胡散臭い言葉自体が嘘そのもので、手玉にとられているのは逆に男のほうではないのだろうか、とも思える。したたかな女は、嘘の喜びをみせ、男になにかとねだっているのかもしれない。女の笑顔は強力な武器だ。小菅はそう思い、過去をなんとかしに振り返ってみた。幸い、家内はしたたかではなく、それは喜ぶべきなのはわからなかったけれど、こうやって今も丹精こめて弁当を作っていることに関しては、素直に喜ぶことができた。

店の客層は、にぎやかすぎずしかし寂れすぎてもいない住宅街という立地のせいもあってか、ほとんどが常連で、大抵は見た顔ばかり。なんの新鮮さもなく、いつものように感覚は麻痺していた。たまに、車を店のまん前に停めて、あわてて店内に駆け込み、トイレを貸してくれと頼む客もいて、そういうときは金魚をすくったときのように少しのあいだ楽しい気分になる。用を済ませた後は、金魚が「ポイ」を破り仲間のいるプールに戻るかのごとく、車に駆け戻りさよならをされることがほとんどなのだけれど……。ああ、なんと愛想のない人間の多いことか。そう考えた小菅自身も、愛想は決していいとはいえず、そのマイナス面は家内が近所付きあいをすることで補ってかれている。二人はそれぞれの役目をいつの間にか自覚し、バランスよくこなしていて、だから今の生活も成り立っているのだろうと思うことができた。

しばらくすると、家内が作り終えた弁当を店内に持ちこみ、陳列した。そのときに居あわせた老人客の一人が、家内の後ろから、並べられる弁当をもの欲しそうな表情で見つめていた。並べ終わると、今度はそれぞれの弁当を一つ一つ手にとり、物色するように見入った。小菅は、この老人がこれからこの弁当のどれかを食べるのだろうということが可笑しくてたまらなかった。自ら選んだなにかを食べるこの老人は生きる、ということが無性に可笑しかったのだ。当然、生きるために食べるこういうのは当たり前のこと、しかし、ほとんどの老人はそこに執着を思わせる。いや、老人でなくともいい、温かな家族の食事の団らんだってそうなのだ。人々が幸せに満ちて好みの食事をするどの姿も滑稽なのだ。小菅は思った。私も笑われるべきなのだ、と。そして、人の目を盗んでなにかを食べるということはとても利口で、マナーを学んでフランス料理を食べることよりもよっぽど気高いのだ、とも思った。幸福を笑っているので

はなく、無警戒をいつているのだ。必死さは時として嘲笑を生むことがあるものの、やはり、無用心のほうこそ笑われるべきだ。とくに、生きるうえでは。

老人はぶつくさいいながら手にとった弁当とペットボトルのお茶をゆつくりとレジカウンターまで持ってきた。焼いた鯖の弁当だった。小菅は「温めますか？」と聞かず、代金を伝えた。すると、「温めてはくれんのか、最近はだれもが冷たいのう」と老人は小さく呟いた。小菅は聞こえない振りをし、会計を済ませた。できたての温かい弁当をなぜ温める必要があるのか、小菅は老人の皺だらけになっている砂漠から生まれたような手をじつと見ていた。冷めていない弁当だったということもあり、小菅の真意はきつと伝わらなかったに違いなく、少し、弁当も老人もいまいましく思えた。

一段落終えた家内はせわしなく、弁当を作り終えたあとは続いて家事にとりかかる。洗濯や掃除、買い物とあくせく働き、昼過ぎの休憩までまともに会話すらする暇もなくて、だれよりよっぽど働いているように思えることもあった。しかし小菅は、それが家内たるものの有りようだ、と考えていて、手伝うことはせず、客のない暇を見つけては居間との境で煙草をふかし、外の通りをのんびりと眺めた。もちろん、怠けているように見えても、店内のことはほとんど小菅がやっついていて、店を閉め、最後に寝るのも、だれより早く起きるのも小菅なのだ。

店のある場所は住宅街にもかかわらず、昼を回った直後から弁当を買いに客がどつと押し寄せてくる。常連以外ではスーツ姿や白衣姿（なぜか彼らはいつも堂々としている）の者も多く、一瞬にして店の奥が人で見えなくなるほどごった返すものの、それでも小菅は一人でレジスターを打った。そして、その時間を刺激のあるものとして一応は楽しんでいた。その時間帯こそがあとになって働いたと実感できるもので、その時間以外はただの、老後を暮らす父の顔と同じような表情になっているに違いないと感じていた。昼以外の退屈しているとき、ふらつと外に出ると、雲が夜空をこするような

動きも十分に確認できたし、影の微妙な傾きだつて把握することができた。近所の猫が鳴いた回数も数えることができるのだ。近隣の住人が通れば、軽く、会釈だけはし、よく晴れた日には皆一様に、表情がとても穏やかだった。

近所には早口で界限に有名な畑中という五十を超えた婦人がいて、いつも白を基調としたシンプルで、そして清潔感のある格好をしていて、一見すると、教養もありそうなものだけれど、話す畑中さん自身の口の動きが追いつかないほどぺらぺらと言葉を放つものだから、一瞬にして清らかそうだったイメージが破壊されたのを、小菅がここに新店舗を構えるために引越してきた当初の衝撃として覚えている。畑中さんも近所の住人ということで、今では一応はこの常連で、小物や食料品以外には女性週刊誌を何冊か、定期的に購読してくれている。きつと、一流の声優だつて苦労しそうなあのとてつもない動きをする口から、近所の婦人連中と芸能人の話やくだらない噂といったあたりとあらゆる低俗な話題を飛び出させ、ちよつとした人気と、精神的主導権を握っているのだろう。しかし、そんな畑中さんは、近所の一部の住人から、壊れて早送りにしかないビデオデッキのようだと、と陰口を叩かれているらしい。店の界限には住宅がマンションを含めて六十棟ほどあり、車通りの少ない車道をはさんで数えれば、もつとあるのだけれど、とりあえず、よく見る連中はたぶんこの六十棟の住人で、そして、その界限ではだれが作ったのか、いつのまにやら大きい派閥が二つできていた（簡単な集まりというのは気づけばできているようなものなのだろうけれど）。一つはあの早口の畑中さんが率いるもので、もう一つはいつもエプロンを着て頭も白髪混じりという、まったくお洒落に興味のなさそうな、女性としての魅力の消えうせた、草しか生えていないような田舎から出てきた古田というこれまた五十代の婦人が擁するものだ。小菅はあまりそういった女同士のどろどろとした話に興味がなく、以前、家内がどちらの派閥に属するか畑中さんに詰め寄られたことがあったのだけれど、そのときは小菅が表に出て、

無益で醜い争いに家内を巻き込まないでくれ」と一喝した。すると、婦人は顔を紅潮させ、「なんっ人、二度っ店っ行くもっでか。こっ町で商売できなっしてやっわ」といつも以上の早口でまくしたてたのだけれど、商売を妨害するような感じの意味だということは何んとなく理解でき、「人のささやかな幸せのある生活を奪おうというのでしたら、あなた自身もそれなりの覚悟が必要ですよ」といつてやった。すると、次の日からほぼ毎日、あわせてけっこうな金額になる商品を媚びるような笑みを浮かべて購入してくれるようになったのだ。

一方、古田さんのほうはといえば、真面目という文字が一面に書かれた服を着て、同じように真面目の旗を掲げてもなんら違和感がないと思えるくらいの生真面目ぶりで、二人の息子は一流大学に在学中、娘は弁護士になっっている。婦人は町内会の役員もしているようで、肩書的には古田さんのほうが畑中さんよりうえだ。小菅が知っていることはその程度のことと、それ以上あまり深いことは家内に聞かないようにしている。婦人たちは婦人たちの社会でそれぞれ苦勞のあるいがみ合いをしているのだろう。それをわざわざ知って、こちらまで精神的な苦勞はしたくない、と思っただからだ。

面白いのは、畑中さんと古田さんが店内で鉢合わせたときで、そうやって人をあまり笑いたくはないのだけれど、それでも、彼女らが店内のガラスや鏡越しに、お互いの姿を意識して避けあっているあからさまな姿は、ひねくれた子供のようでもあり、警戒する猫のようでもあり、馬鹿らしくて苦笑せずにはいられない。しかし結局、小菅にとっては二人ともいいお客であっった。

昼の客に畑中さんがまじっっていた。とくに会釈以外の挨拶という挨拶は店内ではせず、ただ購入される品物からなにかと想像を巡らせるだけだ。今日は、どうやら弁当やお茶などを買っつて、珍しく昼食を作る手を抜いたようだった。会計を済ませると、いそいそと肩を他の客にぶっつけるような勢いで出ていっった。あの婦人は口だけでなく、行動もせわしななかつた。まったく落ち着きがないのだから、

いったい家庭でどのような暮らしをしているのか、洗濯機の回転や、扇風機の羽の回転さえ不満に思っているようで、なかなか楽しいであろう生活をしているような気がした。

昼もすぎると、陳列されてあった商品が所々抜けているのがつく。簡単に補充し、それから家内が弁当の残り物で彩つてくれた卓袱台につき、遅めの昼食をほとんどは二人でとっている。砂浜のすべての砂をぎゅうぎゅうに詰めた砂時計を見続けるような一日の中で、ようやく家内とまともに話をすることができ、小菅は多少、この時間を待ち遠しくも思っていた。

「裏のおじいさん、もうそろそろ危ないんですって」

家内が玉子焼きの切れ端をつまみながらいった。ほんとうに何気ない、小菅の嫌う陰口ではない、近所の話題が昼の主な内容だった。

「そろそろ？　じゃあ最近亡くなったのはだれだったかな？　てつきり裏のじいさんかと思っていたよ」

「先週亡くなったのは、吉山さんのおじいさんですよ」

「ああそうか。裏のじいさんが亡くなると、きつと静かになってしまうなあ。多少、界限にも子供が増えて、しっかりと叱ってくれる頼もしい人だと感謝もしていたのに」

「叱ってくれたのは吉山さんでしょ」

「ああそうだったか？」

家内は少し呆れた表情を見せた。

食事も終盤になると、並べられていたおかずはほとんど平らげられて、最後には消しゴムのような玉子焼きだけが一切れ残っていた。小菅は家内よりも多く口にしていたので、ごちそうさまというとしていたのだけれど、ふと、店内の様子を気にしてまた目をちやぶ台にやると、玉子焼きは半分に分けられていて、瞬間に、少しの憤りと、いじらしさと、涙の予感とで複雑な気分になった。小菅は、それほど食べるのに苦勞するような生活の日々ではない、家族にひもじい思いをさせているはずはない、と思っていて、それは間

違いではなかった。目の前の玉子焼きが、無造作に分断され、波に流され離れていくだけになってしまった島のように見え、少し、やるせなかった。せめて、向かい合う二人に対して垂直にはなく、水平に分けられていたのなら……、きっとこの思いはなかったに違いない。

「なぜ、今日に限って、お前はこんなことをするんだ」

できる限り感情を押し殺してたずねた。

「こんなこと？ 玉子のことをいつてるのかしら？ いららないのならいただくわよ」

家内はぺろりと二切れとも口に放り込んだ。あつ、と思わず言葉が飛び出た。なんとということだろう、家内の行為は、理由なき厚意だったのか。くだらないことを深く考えて、みすみす最後の玉子焼きを逃してしまった。いや、分けられる前は家内にあげるつもりではあったのだけれど。たかが玉子焼きと人はいうかもしれない。しかしどの家庭でも、好物の取り合いと、その隙をはかる攻防が内心でも繰り広げられているはずではないのか。貴族であろうと、おいしいものは人より多く食べたい、本音はそうであるはずだ。きつとそうなのだから、「たかが玉子焼きで」と笑ってはいけないのだ。玉子焼きが日曜日の平和な昼を思わせるのなら、さくらんぼの甘い果実でもかまわない。一つだけ残されているのを見れば、きつと、少しくらいは卑しい思いが生まれるはずだ。小菅は、まんまと家内の気まぐれにしてやられたという気分になり、かといって、恨んだりはずせず、この経験を次に活かせばいいじゃないかと考えた。

昼食の時間には幸い客はなく、小菅は店に戻るとふくれた腹を軽くさすりながらまどろみに似たものを、カップに注がれたコーヒ―のその香りだけを楽しむような感じで味わった。瞼の中を、赤い虫が円を描いたり波打たせたりして踊っている。小菅はたまに、不思議な感覚を味わうことがあった。それは、睡眠中、ふと目を覚まし、確実に目が開いているにもかかわらず自分の寝ている部屋と違う見たこともない場所が視界に映っているというもので、そして

なんどか瞼をまたたかせると、それぞれの瞬間に、自分の部屋と、知らない部屋とが交互に映るのだった。やがて力をいれて瞼を閉じると、知らない空間が圧縮されるように脳内に入りこみ、瞬間には小菅のすぐそばに、だれかがいるような気配を感じるのだ。しかし、不思議と、その一瞬に目を覚ますことはできず、朝になって、不思議な体験をした、と思い出す。もちろん、夢だろうと思っっている。そう思っていたほうが混乱しなくて済むし、なにより、夢でないとして、家内や娘に話したところできっと、夢でもなければ狂ったのよ、といわれるに違いないのだから。

空に浮かぶ充血した碧眼が、辺りの雲まで紅く染めた。じきに、娘が帰ってくる。通りの先にある、自転車でのぼるにはかなりの苦勞を強いられるあの坂から。

小菅は、娘がその坂の頂上に徐々に姿を表す瞬間が好きだった。紅く揺れる太陽を背に、黒く長い髪をふわりと風になびかせ、少女は歩く。アスファルトに細い影が伸び、その影が少しだけ小菅のほうに早くつく。ほぼ毎日店の前に出て、お帰りという瞬間が好きだった。ただいまといわれるその瞬間だけには恋をしていた。それは、坂と太陽の生み出した幻想的な世界だからで、とくに枯れ葉の舞い散る秋は芸術作品を思わせるほど素晴らしかった。まあ、そのとき以外で、娘がどうというわけでもなく、そして、それが健全だし、そうでなければいけないとも思った。考えると、坂に登場するのは娘でなくともいいのかもしれないのだけれど、今まで見た中では、やはり娘が最高の画だった。なぜなら、あの坂をのぼるのはこの時間、ほとんどが買い物帰りの婦人連中で、息急ききらしながら買い物袋をぶら下げた自転車を押しての登場は、どこにも美がなく、さすがに目を覆いたくなるものがあつた。

店の前で小さく一服していると、やがて娘がゆっくりと登場し、小菅は客が来ないことを祈つた。今日も一人で帰宅したようだったけれど、女の子の友人と二人で帰ってきたときは、いつもと違った輝きがあつた。それも小菅が好きな瞬間だったのだけれど、じつと二人に見とれていたりとすると、なんとなく、近所の住人に訝しがるような気もして、すぐに店内に戻ることにしていた。いつの間にか近くにいた娘がカバンを小さく小菅の腰にあてた。

「なにぼうつとしてるの？ ただいまっ」

「あ、ああおかえり」

「また、カメラで撮りたいとか考えてたんでしょ？」

「ん？ いや、もう思っでないよ。毎日写真を眺めて、素敵な瞬間を見飽きたくはないからね。それに、インスタントカメラじゃため息の連続になるだけだろうしな」

「親バカもほどほどにね」

娘はそういつて部屋に駆けていった。親バカとは少し違うのだけれどね、と思いつながら手に持っていた空き缶に煙草をつぶし、娘が交代にくるまで雑務をこなした。

娘は髪を結び、前掛けをして少し気合をいれ、それから店内のそれぞれの商品を指差し確認で注視しながら歩いて回った。夕方の働き始めはこうやっていつも張り切っていて頼もしく思えるものの、アルバイトも終了間際になると、お客が途切れるたびに時計ばかり見て、ほんとうに退屈そうにもしていた。

小菅はというと、居間と店内を頻繁に往復した。というのは、夕方の場合、娘のファンらしき客が次から次へとよくくるからで、そのたびに居間から飛び出し店内で監視をしたのだった。娘は呆れて「ただのお客さんじゃない……」ということもあった。朝のクラスメイトのような会話こそあまり聞かなかつたけれど、店内で見ると、男たちの視線が娘にばかりいつているのがすぐわかる。なんとわかりやすく単純なのだろう、と嘆きたくなることもあって、だれにも悟られない想いのほうがよっぽど楽しいということを一人的男として教えてやりたくなることもあった。だれにも悟られない想いの楽しさというのはもちろん、死ぬまで思慕し続けて結局、相手に悟られないなんてことになれば意味がないのだけれど、そつと見守るような、いつもふと見かけるような、それでいて相手が気づいていないというのがよくて、だからこそ、なにげに目が合ったときに喜べる。相手が思われていると感づいたなら、喜んでくれればいいのだけれど、調子に乗る場合や、逆に避けられる危険もあって、その場合、やはり、悟られるのが早すぎたということだと思つ。だからじっくりと攻めたほうがいいのだ。と、若々しく恋愛談義を一人催してみたことに対し、小菅は意外な気分になった。そして、

彼らの恋の消失を祈るために、娘に対しては絶対に、早々に悟られたほうがいいのだ、と思いなおした。男として男の味方になるより、一人の父として娘の看守になることをいつも以上に強く決意した。と、まるで小菅が、「娘を嫁にやらん」と頑なにいい続ける偏屈親父のようにも思えるかもしれないのだけれど、当然、いつかは娘を嫁にやらなければいけないのだということは理解していて、今はたんに、若さゆえの過ちを犯さないかという心配をしているだけなのだ。きつと、どの父親だってそうに違いはないはずなのだ。そこには責任という言葉が背中につなげた風船のようにちらちらと付きまとっているのだから。

以前、万引きした中学生の少年がいて、どうもわざと見つかるようにくすねたふうだった。あとになってなんとなく気づいたのだけれど、彼もどうやら娘を気にいつてしまったようで、気にしてもらいたくて、だからあえて見つかるようにしたらしかったのだ。いじらしいというか浅はかというか、とにかく、そのときは見逃してやったものの、商品ではなく娘を狙う餓鬼だということがわかった今は、たとえ幼い少年が娘の眼中になくとも、小菅は監視した。しかし、「まったく呆れちゃう」などと娘にいわれ、考えてみるとなるほど少し大人気ないような気がして、とりあえずその少年に対してだけは監視の目をゆるめたのだった。

「ねえ、このお菓子、買うね」

とチヨコレートクッキーの箱を手にとって見せた。

「仕事中に店内の商品を物色するのはやめなさいっていつてるだろっ」

「だって、お腹が空きやすい年頃なんだもん」

小菅は嘆息をし、半ば呆れながら会計する。

「あまり甘い物ばかり食べると小次郎みたいにぶくぶく太るぞ。それに、もうそろそろ夕食だろっ」

「いいのいいの、心配無用よ。それと、もう仕事終わっていいで

しょ？」

返事も待たず、そのまま気まぐれに仕事を切り上げ、部屋に戻っていった。

ところで、小次郎というのは近所で飼われている雑種の犬のことで、性格は人懐っこいものの、水を詰めたような贅肉が中型の身体を大型にまでふくれあがらせ、その肉は歩くたびにちやぷんと波打ち、最近では暑い天候もあってか散歩も嫌がりだしたようで、ずいぶんとぐうたらにもなったそうだ。飼い主がリードを強引に引っ張る姿をよく見かける。まるで、石で作られた狒犬を必死に（しかし実際、飼い主は無表情だった）引っ張っているようにもとれて、滑稽だった。それに小次郎はよくよだれを下品に垂らした。犬はそういうものだ、と考えても違和感はないのだけれど、道路できらめく小次郎のよだれは赤や緑の気色の悪い虫を大量に引きつけた。昆虫は花の香りに引き寄せられると聞いたことはあったものの、よだれに集うなんて、それに、集まるのが蝶やミツバチならまだいいのだけれど、いざくるのは人の嫌う蛾や蠅といった類で、小次郎を呪術師のように恐ろしくも思ったりしたものだ。しかし、結果、害虫はそのよだれで溺れ死ぬのだから、逆に駆除の恩恵にあずかっているということに感謝すべきなのかもしれない。まあ、死骸だらけでテカテカしている道路を歩くのは気分のいいものじゃないのだけれど。

居間からテレビの音が漏れ、笑い声が届いた。そうやって楽しそうな音を聞くと小菅は、「この店をたたんで、煙草屋でもするか」と考えることがある。それは、少し離れた場所にあるタバコ屋の老婆がいつもテレビを見ながら接客しているからで、もちろん、煙草だけで家族を養っていけると考えてはおらず、すべてはほんの少しの寂しさのせいだった。

「なあ、次の休みくらい家にいたらどうだ、たまには家族で落ち着いて食事でもとらないか？」

小菅はつい、娘に声が届くように問いかけた。

「だめよ、絵の勉強があるから」

本格的に勉強がしたいといって娘は高校の美術部を辞め、ここで働き、絵をどこかへ習いにいつている。この、「どこか」ということを知らないというのは、親として恥ずかしいことなのかもしれないのだけれど、娘はなぜかたくなに口を閉ざすのだから、どうすることもできない。しかし、確実に絵を学んではいるようで、不安はあるものの、今までなにこともないのだから親としてはもう信じるしかなかった。今、小菅にできることといえば、必死に勉強している娘を美術大学へ金銭的な心配をさせずに行かせてやることくらいだろうか。そのためにも働いているわけで、だから無理にビールの美味しい夜の食事を家族とすることもしないのだ。日々に小さな幸せはあるのだし、寂しさを感じるなどと女々しい気持ちは棄てようではないか、小菅はそう考えた。

辺りはもう十分に暗く、ときおり走る車が放つヘッドライトの黄色い粒子が帯のように流れ、ガラスににじむ。店内には一人、立ち読み客だけがいて、風貌から人物像を推理するのを小菅は、退屈なときは楽しみの一つとしていた。見ると、漫画雑誌を読んで、ただの若いサラリーマンのようであるけれど、ページをめくる様は参考書を吟味して読むかのように静かで落ち着いていて、そこには教養が滲みでているようでもあり、しかし、読まれている漫画は子供向けのものだった。そのとき、小菅の視線に気づいたのか、青年ははつと振り返った。急な動作に驚いた小菅は反射的に目をそらしたのだけれど、青年はどうも不機嫌を顔に表しているようだった。どういふふうにもこの空気を取り繕うか考えていると、青年は踵を返し、なにも商品を持たずレジカウンターに向かって歩いてきた。ああ、なにか文句をたれるに違いない。放たれる言葉はきつと、彼のかけている辞書のように分厚い眼鏡をわざわざ介すようにして難解化されるのだろう。

「失礼ですが、最初から万引きをするものとして決めてかかり監

視されているようで、こちらとしてはあまり気分のいいものではありませんね。いずれ客をなくしますよ」

まったく見当違いの思い込みをしているようで、毅然とした態度が、青年が自分の正当性を確信しているようにすら思えた。小菅は、こういつたくだらない自分の中の正義にとらわれさらに、たとえ正当性を得ていたとしても、講釈までたれるという性格の人間が嫌いだった。お客といえど、青年のちっぽけな正義にうぬぼれた自尊心を折ってやろうか、と少々意地悪な気持ちになった。

「万引きを警戒して見られたように思える、というのは、それはお客さんの思い込みなんじゃないですかね？ 私は事実、お客さんが万引きするなんてこれっぽっちも、石の欠片ほどにも思ってませんでしたよ。見たところ、利発そうだし、健康的でとても若々しく、まさか、お客さんがそんな被害妄想じみた思考をなさるなんてね。人は見かけによらないもんですね」

すると、青年の頬は少し痙攣したかのようだった。

「僕が被害妄想じみています？ 客に対してあまりに失礼な言葉ですね。あなたの視線から警戒心が伝わったんですよ！ 『盗れるもんなら盗ってみやがれ、すぐに警察に突き出して社会から抹殺してやる』という殺気じみたね！ おだててから落とすようなそんな陳腐な論法では僕に屈辱を与えることなんてできませんよ。もっとも、万引きの疑いをかけられたというのは屈辱的なことですけどね！」

「お客さん、あなたはやはり思い込みが強い性格なんですよ。だってね、私はただだんに、お客さんがどういった仕事をしてどういう生活を送っているのか、あなたの格好を見て、その毎日を想像していただけなんですからね。気持ち悪いと思うかどうかはともかく、万引きを警戒されたというのは、やはり、あなたの心のどこかに万引きをしようという気持ちがあつたんじゃないですか？ それとも、すでに私が気づかないうちになにかくすねたんですかね？ いわれるまえにいつておきますが、これは侮辱ではなく、あなたの言動か

らきた当然の帰結ですよ」

しかし、店主に見られれば、万引きしようなどという気持ちの有無にかかわらず不快な気分になるといふことは、小菅自身も他の店で体験していることではあつた。青年は小菅の言葉に、心外だといわんばかりに顔面を紅潮させ、拳を握りしめ、今にも殴りかかるうとしているようにすら捉えることができた。

「な、なんて店だ！ 許せない……」

青年はそれ以上言葉を発することはなかつた。小菅もさすがにいいすぎたのかもしれないと思い、ひとこと謝ろうとしたのだけれど、ちょうどそのときに別の客が入つてき、どうやらそれは青年の恋人だつたようで、それを確認した彼の態度ががらりと、しかも、軟弱な甘えん坊のように変わったものだからそれ以上ににごとも発展せず、そればかりか少しの買いものまでして去つて行つてくれた。女のなかには男の前でぶりっ子する者もいると聞いたことがあつたけれど、まさか男にも似たような人種があるとは知らなかつた。変貌ぶりは他人の前であまりにも露骨で、少し彼を憐れにも思つたものの、見覚えのない一見の客ということもあつて、この先の経営になんの懸念もないだろうし、そんなことよりも、初めて見るタイプの人間に感動と興味すら覚えていた。

居間のすぐそこで家内と娘の二人が聞き耳を立てていて、客が帰るとすぐに「お客さんになんて態度ですか。でも、へんな男だつたわねえ」と家内がいつた。

「利口そうだつたのにな。ありやきつと結婚してから女は苦勞するんじゃないか。今は楽しくてもね。でもまあ、笑うのはよそうじやないか」

「はいはい、じゃあお仕事頑張ってくださいよ」

それから入つてきた客に対して小菅は、なるべく観察しないように心がけ、淡々と接客をこなした。それでも、どうしても自然と視線はちょこまかと動くお客のほうに行つていようで、これはきつと動体視力のせいなのだろうと考えた。それに、動くなにかを見

るということは脳に刺激になっていいのだとも思える。しかし、また面倒なことになるのは御免で、客を見ることはなるべくやめて、小菅は期限の切れそうな商品の回収や陳列に勤しんだ。

深夜十二時すぎ、最後の客が買い物を済ませたあと、小菅はシャッターを閉める。長く、退屈の多い一日のようやく終わりだった。外に出てシャッターを静かに下ろすと、夜の、ほんのりと冷たい沈んだ空気を胸に少しだけ収め、明かりのついている近所の家々の窓を眺める。黄色や白のその明かりがいつも眩しくて、でも、やがて見上げる夜空の星とすぐに比べてしまい、星の輝く日は電灯に照らされている人々に対しての優越感もあった。「明日も晴れかな……」小菅はそう呟き、家内のいる居間へと戻った。食卓には湯気立つお茶漬けときゅうりの浅漬けが三枚小皿に添えられてあって、「お疲れ様」と家内の言葉もあった。「ああ」と返事をし家内に伝票を渡す。テレビで適当にニュース番組を探し、お茶漬けをすすりながら、しかし小菅の気はまだ完全に休まっではいなかった。

「今日はやけに疲れたよ」

「大丈夫ですか？　なんでしたら、あとの作業手伝いますけど」

「いや、ありがとう。それには及ばないよ。無理しなくていいさ」さらさらと流し込んだあと茶碗を置き、冷たい麦茶を飲んだ。

「あなたも、あまり無理はしないでくださいよ」

「ああ。ところで、あいつはもう寝たのかな？」

「さあ、どうでしょうね」

「ごちそうさまと言って箸をおき、それから小菅は静まり返った店内に戻り、独り作業を続けた。清掃の途中に雑誌の見出しが気になり、つい十分ほど立ち読みをし、見出しと内容のギャップに少しだけうんざりとした。しばらくして家内から先に寝るといふ挨拶があり、軽く返事をした。店内の明かりを消すと、冷蔵システムの唸る音が暗い中に顕著に響く。小菅は居間との境に腰を下ろしたまま店内の闇に取り込まれるようにして肩を下ろしぐったりとした。そうして不意に顔をあげ、「よし」、と気をいれなおすと居間に戻り、

冷蔵庫から瓶ビールを一本。テレビの明かりだけで寝酒をたしなむのだった。なぜ、このときに飲む酒は疲れを忘れさせてくれるのだろう。小菅は少しの幸せを感じながらそう考えた。

テレビには、七十年代の映画だろうか、アメリカの若者たちが騒ぎながら夜の街を車で走らせているシーンが流れていて、日本語テロップにはしきりに、ドラッグやセックスという文字が並んだ。

それをばかばかしく思いながら、ビールの残りをコップに注ぎ一気に飲み干し、ほんの少しの酔い心地を楽しみつつ二階へとあがり、家内の寝顔を少し見たあと、布団へ静かに潜った。掛け布団の柔らかさが酔いの心地よさに似ているような気がした。

眠ってからしばらく、小さなうめき声が夢の中に入り込んできた。そうしてそれは映像をかき消すほどに大きくなり、頭の中を暴れ狂った。そしてすぐに家内が隣で苦しんでいるのだということを理解した。はっと飛び起きると、家内は薄暗い中、胸を押さえるようにして苦しみ、目を強く閉じたまま表情を歪ませていた。

「おい、どうした。おい」

小菅はこんなとき、どうすればいいのかわからなかった。咄嗟に救急車を呼ぼうとし、しかしそれにはなぜか家内の同意が必要な気がして、「き、救急車を呼ぶか？」となんとも情けない口調で聞いてしまったのだけれど、苦しみながらも「大丈夫よ」という返事に小菅はもう動くことができなくなった。だけでも、やがて家内は落ち着きを取り戻し、「ごめんなさいね」と一言いい、水を飲みにおりていたのでほんの少し胸をなでおろすこともできた。小菅は自分の鼓動が速くなっていることに気づき、妙な不安に包まれる感覚を感じ、娘を起こさないように静かに階段をおり、「なあ、なにか悪い病気じゃないのか？ 心臓病じゃないのか？ 朝になったら病院に行ったほうがいい」と心配すると、コップをおいたあと「仕事を、ほら、やらなくちゃいけないでしょう」と無理に笑顔を見せて気丈に振る舞って見せるものだからつい、「なにをいつてるんだ

！　こんなこと初めてじゃないか。体のほうが大切に決まってるだろう！」と叫んでしまったのだ。今の声できつと娘は目を覚ましたと思う。

「いいか、絶対だ。絶対に病院に行くんだ。どんなことをしてでもお前を働かせないからな」

「わかりました。病院にはいくわ。お弁当は……そうねえ、香奈子に作らせようかしら」

「ああ、そうするといい。嫌とはいわないだろう」

家内を布団まで見守り、静かに眠るのを見届けると小菅はまた居間へ戻った。また苦しみはしないかという不安があつて、そのときはもう救急車を呼ぼうと決めた。

なにがあつてもあわてず、冷静にならなきゃいけない、と何度も自分にいい聴かせる。

ふと時計を見ると時刻は四時すぎで、もうすぐ業者が搬入にやってくるな、と考えた。たまには挨拶でもしようと思い、娘の鏡で顔と髪の状態を確認し、頭を手で数度といた。

家内の体の不安に苛まれながらも、病院に行くのだからきつと大丈夫だと考え、小菅は気を紛らわすなにかを探すことに勤めた。煙草に火をつけ新聞配達バイクの音がしないか耳を傾ける。家内がもしも、ということすら考えなくなかった。嘆息し、冷蔵庫を探り冷たいお茶を飲んだ。

テレビをつけると、筋骨隆々の肉体美を、てかるオイルで一層強調したアメリカ人が白い歯をむき出しながら健康器具の説明をしていて、ひどく滑稽に思えた。それは、新発売だと謳っているのにすでに身体ができ上がっていることへの矛盾もあったからだ。まったくテレビとはいいい加減だ。他のチャンネルにいたっては夜の高速道路を映しているだけなのだから。そこに対して、事故でもおきないかな、と思うのは私だけだろうか、と小菅はふと考えた。なぜそういった恐ろしいことを望んだのか深く理解はできなかつたけれど、なんとなしに、感覚的にはやっぱり刺激を欲しているような

気がしていた。灰を落としそうになりあわてて灰皿へ火種をつぶす。なにも考えずにいると家内への不安がすぐに沸きおこり、そのたびに小菅は頭をかきむしった。

「ねえ、なにがあつたの？」

娘だった。音もなく現れたそのこと自体が家内への娘の不安を思わせる。

「なにもないさ。ただちょっと疲れたらしくてね、母さんは病院へいくんだ。だから今日は代わりに弁当を作ってくれないか」

「悪い病気なの？」

娘の表情は心を悟られまいとするかのように凜としていたのだけれど、目には不安と悲哀のようなものがゆらゆらと漂っていた。

「わからない、だから病院にいくんだよ。だけどきつと大丈夫さ。あまり心配するな」

「うん……じゃあ今日はお弁当を作ればいいのね」

「とびきりうまいのを頼むよ」

「わかった。今から作るね。早すぎかもしれないけど久しぶりだから余裕をもって」

なにかを食べたり、居間に腰をおろしたり、そういうことができる気分ではないのだと思えた。

「……そうするといい。母さんを起こさないようにな。それと、ちゃんと昼の分まで多めに作るんだぞ」

うん、と返事をし、振り返りざまにほんの少し憂えた横顔を見せて娘は台所の明かりをつけた。同時に表からトラックのとまる音がし、やがてシャッターの開く音も届いた。小菅はまた煙草に火をつけ、さして表情は作らずに挨拶をした。

「やあご苦労様」

「ああ、おはようございます。今日は早いですね」

運送業で鍛えられたようにも見える頑強な体格からは想像のできない透き通った声と、子供のように無垢な笑顔で彼はいった。

「どうだい景気は？」

顔を合わせたものの、やはり大した話題もなく、ほとんどはこのようなありきたりな質問になるのだろう。

「ええ、小菅さんとおかげですいぶんといいですよ」

「ん、きみはそんなお世辞をいうタイプだったかな」

「嫌だなあ、お世辞じゃないからいえるんですよ」

商品を床に積み重ねながら彼は笑った。

「なるほど。しかしもともと、たいして儲かっていないんだけどね」

「あ、そうでした？」

朝から疲れるような元気な笑顔を見せつけてくれたあと「それじゃあ次がありますんで」と頭をさげて外に出、車を走らせていった。

白んできた町にトラックのテールランプの薄い赤が滲み、あの光もやがて消える、と考えた瞬間、小菅は少しの不安と愁然にとらわれた。

「ちくしょう、悪いほうへ悪いほうへと考えてしまふ。結果だ。早く検査をして結果が出ればいいんだ」

青白い雲の合間に取り残された、足の小指のように不恰好な月がほんの一瞬だけ視界に入った。

煙草を缶にこすりつけ、なにげに見た郵便受けにはいつの間にか新聞が入っていて、それをテーブルに放り投げ、弁当作りに勤しむ娘の後ろ姿を見ながらほんの少しの笑みを浮かべ、ほんの少し早めの朝の準備にとりかかった。結婚して十八年、今までなかった不安を抱えたままの朝の作業は、普段に増して単調で、気づけば目の焦点は定まらず、しかしふとした瞬間にはポジティブに思い直すこともでき、まったくこの感情は無意味で実に空虚だと知った。思えば小菅自身、今朝見た家内の苦しみ以上の大病を患ったことがあった。あの瞬間は、内臓を錆びたスプーンですくわれるような痛み、吐き気、めまい、それにいいしれぬ不安があつて、薄れる意識の中で死の覚悟をするほどだったのだ。気がついたとき、そこは病

院のベッドの上で、いつの間にか手術も終わっていた。隣には父がいて、その隣には母がいた。目を覚ましたあのときの母の表情それは純粹に息子の無事を喜ぶものだった。今の私にはきつとあの表情は出来ない、と小菅は思った。なぜなら、家内はきつと手術の必要もないくらい軽い症状に違いないのだから。しかし、あの安堵の表情を生むに至った母の不安と同じものは、娘のいる今、きつと感じることができのたろう。いや、母の心は父にはわからないのかもしれないのたれど。

ふと、両親に会いに実家へ帰りたくなつた。田舎を思うとき、心の中にはいつも敵しかつた父がいて、その隣にそつと見守る母がいる。しかし現実にはもう、もうろくしている父とそれを嘆く母しかない。父には、感情すらないのではないかと思うこともあつて、人形のように見えたこともあつた。父を見れば自分の老い先を考えて、きつと切なくなるだろつ。それなのに帰りたいなんで、自分がなんとなく軟弱に思えた。

そういつた様々な考えも、単調作業の真髓に入り込むとすべて消え、ただロボットのようになる。外を見ると、もう太陽も十分に顔を出していた。さあ、朝だ！小菅は、私は商売をしなければいけないのだ、と頬を両手で叩いた。

朝に、ほぼ毎日やってくる娘の友達が当然のように今日も顔を出し、小菅が店番をしていることに虚を衝かれたのか、店内に入るなり足をとめた。不意に小菅はほくそえんでしまい、見ると、少年はなにかいわれるのではないかというような不安があったのか、どきまぎしていたけれど、やがて小菅の顔を強い眼差しでちらと確認すると娘が出てくるまで待つてやるといわんばかりに頷き、立ち読みを始めた。小菅は彼に対し、なんとなく苛々とした気分を覚えた。それは、小菅の顔つきを見てちつとも怖くないと改めて思ったはずで、なんとなく娘の父という存在を軽視されたような気がしたからだ。このままでは、今後さらに娘に強烈にアタックするに違いないと小菅は考え、娘の看守としての威厳を見せておく必要がある、とまずは咳払いを二度して彼の注意をこちらに引こうとした。おまけに小菅自身初めてのことだったのだけれど、店内で煙草をふかすという愚拳にも出てしまったのだ。睨みながらした咳払いを彼は一向に意に介する様子を見せず、そればかりか彼の口元が緩んだようにすら見えた。読んでいる雑誌のせいなのか、小馬鹿にしているのかはわからなかったけれど、あまりのタイミングのよさに、内に着ているだろうTシャツの色まで見透かせそうな、鋭く送り続けている視線をはずすわけにはいかなかった。煙草は早くも半分以上灰に変わっていた。

「おい！」

小菅はとうとう声を放った。しかし、いったいなにをいえばいいのか瞬間に戸惑い、それに娘にあとで怒られはしないかという不安も沸き、驚いた表情で振り返った彼の顔をなんどもまばたきをして見ることでしかできなかつた。だけれどそれで十分だった。なぜなら、彼は確かに戦慄の表情を浮かべていたからだ。まあ、蛇に睨まれた蛙でないのは確かだ、娘ならパンダに睨まれた高校生と冗談を

いうかもしれない。見た目が怖くないというのはあながち間違ってもおらず、しかしなかなか渋い感じはあると思うのだけれどねえ、と小菅は内心あった。そして、そんな威圧感のない小菅に対し多少の恐怖をいだいたらしい彼は、雑誌を置きそそくさと店をあとにしようとしたものだから、「おいおい待ちなさい。毎日牛乳とパンを買ってくれるんだらう？ 今日は何ぞなにも買ってくれないんだね？ 立ち読みだけして、きみはお客さんなんだろ？」とほんの少しの皮肉を混ぜていった。すると、彼ははっとして立ち止まり、なにかいいたそうにして体をもじもじさせ、下を見ていた。サッカーでもやっていそうな爽やかさのある彼だったけれど、今は消極的な子供でしかなかった。こんなときどうすべきかを学期末テストを解くかのように脳をフル回転させて考えているのかもしれない、小菅は指を焼くほど短くなつた煙草をくわえ、ふうつと一息すると他の客がくる前に後ろにおいてある灰皿に消した。すると、彼は足早に店内を回り、いつものようにパンと牛乳とをレジカウンターにどんと置いた。

「これで、いいんですよね？」

「なにが？」としかいいようがなく、続けて「まるで、買うのを強制したみたいじゃないか」と返した。

「え……あ、違います。これください」

「はいまいど」

「毎日くるのでよろしくお願いします」

彼には、小菅がお義父さんにもなるような感覚があつたのだろうか。そう思わせるような態度に小菅は少し複雑な気分になる。弁当を長い時間かけて作り、家内を心配して学校へいく気配を見せない娘と店番を変わりたくなるような衝動に駆られた。しかしあまり二人を近づけたくはなく、だから、「もう来なくていいよ」と、彼の去つたあとのドアに言葉をぶつけた。

昼前に家内が病院から戻って来、見ると、とくに表情にはいつもと違ったところはなかった。医者がいうには「精密検査をしなければ、なんともいいかねる。しかしまあ大丈夫でしょう」ということらしい。その一言を聞き、また、検査を予約するために待合の椅子で数時間も費やす必要が病院にはあるのだろう。苦しみの大きな者からの先着順なのだ。家内は後日、正確には一週間後に検査を受けるそう、また苦しみはしないかという不安が込み上げたのだけれど、不思議と医者 of 適当なちよつとした言葉でも気は楽になるものなのだということを改めて知り、心が幾分落ち着いたように思った。

「ねえ、今日学校休んでもいい？ もうすぐテスト前だけど午後の授業だけいっても意味ないし、それにお父さんもお母さんの傍にだれかいたほうが安心でしょ？」と、そつと小菅の元へやってきた。

「まあそうだが……。そうだな、外に出て行かないのなら休んでもかまわない。母さんを看るといふのならね」

「もちろんよ、家事もやるわ。じゃあお母さんに寝てるようにいつてくるね。お弁当並べなきゃ」

娘はとたとたと足音を立て、台所へと戻っていった。我が子ながら立派じゃないか、と小菅は少し嬉しく思った。

できたての弁当を世間の昼休みまえにはなんとか並べ終え、娘は頭にタオルなんてまいて髪をまとめ、せわしなく洗濯や掃除にとりかかっていた。家内が暇をもてあましているのか店内に顔を出し、商品のチェックをするものだから「今日はゆつくり寝ていなさい」と優しさと厳しさを込めていった。居間への去り際に見せた表情にどことなく影が含まれているように見え、小菅は心臓をだれかに触れられたような気分になった。医者は本当に大丈夫といったのか、触診や採血と、ちよつとした検査ですぐに重病だと見抜いたのではないか、とえもいわれぬ不安がわきおこったけれど、重病ならすでに入院しているだろう、とひとりごち、自分を納得させた。

日が沈んだ頃、毎朝やってくる彼がまた店に顔を出した。娘と学校でも店でも会えなかったということが彼に様々な憶測を生ませているのだろう、ことの詳細を小菅に聞いたそうなそぶりをなんとも見せ、決断できないまま店内をひよこのようにちよろちよろと回っている。小菅はなんとなくそんな彼を滑稽に思い、しかし恋に懊悩する様には男として同情した。そうして彼を手招きし、少しの警戒を見せられながらも「明後日は朝から働くから、今日はもう帰ったらどうだ」といつてやった。その言葉を意外に思ったのか、ほんの一瞬だけ目をぱちくりとさせ、「あ、そうなんですか、ありがとうございます」と頭をさげ、笑顔すら見せて去っていった。小菅は少し、頭を片手で抱えてうつむき、敵に塩を送ってどうするんだまつたく、しかしきつと彼には甘い塩だったろうな。ばかばかしい、甘いだなんて、と複雑な気分だった。感動を忘れたわけではなかったのだけれど、すでに中年時代を何年も生きている小菅には、「甘い」などと全身がムズかゆくなるだけの言葉だった。

一人の女を愛したあとは、ふとした瞬間の自然との調和のある情景にのみ恋をすればいいのさ、と独り目を閉じる。そのちよつとした時間も、外を右折するヘッドライトの強烈な白にかき消された。音のない静かな店内と、すぐに消える、車が道路を走る音。都会の喧騒とは違う世界、この静かな土深くに眠る生命の安らぎのよくな抱擁感、充足。退屈も多いけれど、いまさらながらにいい場所に越してきたものだ、と思った。そのもの思いもつかの間、一人の客が入ると続くようにして二人、三人と来、すぐに余裕がなくなる。客がくれば、ただいつものように接客し、なにも考えず時の経つのを待てばよく、案外、人は仕事に終われているほうが幸せなのかもしれないと考えた。

仕事を終えシャッターをおろし、おとなしく漂う空気を胸にいられた。居間に娘がいて、「お疲れさま」と久しぶりの挨拶があった。「まだ寝ないのか？」

「うん、ちょっと眠れなくて」

「母さんなら大丈夫さ」

「わかってるけど……。いろいろ考えて、手がね、母さんのことを考えると、手が冷たくなるの」

「結果は出てないけれど、大丈夫と医者がいうんだから大丈夫さ。心配しすぎだよ、なんともないんだから」

娘はうつむいたまま両手の指をなでるようにくつつけたり離したりしていた。

「明日は学校があるんだから早く寝なさい。それと、いつもの彼がすごく寂しそうにしてたぞ」

そういうと、ほんの少し娘の表情が緩んだように見えた。それは吐息とともにすぐに消えたのだけれど、娘から不安な気持ちを取り除いてはくれたようだった。お休み、と小さな声で呟き娘が二階へいくと、家内がおりてくるかと少し待つてみたけれど、どうやら静かに眠っているらしかった。なんとなしに横になり、暗くした部屋に映る下手な花火のような明かりをぼんやりと眺めると、やがて小さな喧騒が子守唄のように耳の奥に響き、外の音と内の意識が次第に次第に耳を通して入れ替わっていくような感覚にとらわれた。きつとこのままここで眠るのだろう、と小菅は思った。

目を覚ましたのは不覚にも身体が覚えているいつもの仕事を始める時刻だった。店休日にもかかわらず早く起きてしまったせいで少しもつたいたいような気分になり、しかし、だからといって二度寝する気にはならなかった。カレンダーを見るとあと一週間ほど先の日付に「終業式」とピンク色の文字でつけたされていた。もうすぐ世間は夏休みなのか、と本格的にやってくる夏を思い、毎年家族をどこにも連れて行ってやれないことを、それは不幸になるのかと少し考えたのだけれど、娘も高校生なのだから家族と遊ぶよりも友人と遊んだほうが楽しいのかもしれない、と考えながら煙草に火をつけて煙をもてあそんだ。ふと、すりガラスに映える群青の色を

見た。太陽はまだ昇り始めたばかりのようで、いつもは仕事をしているか、休みならば寝ているこの時刻、なぜだか外を歩きたくなくなった。それはべつに太陽のせいではなく、気分的なものというだけで、やはりそれ以外ではなかった。外でよくよく空を見上げると、彼方に少しだけある、青白く細長い爪の先のような薄い形の空が、朝日を背に受け、黒い皮をはぐようにその爪の白さで徐々に空を覆っていた。小菅はなにも考えず、足の向くほうに従いのんびりと歩く。とくに感慨という感慨はなくて、いつもと同じだった。そうしてしばらくいくと救急車のサイレンとカブのエンジン音があってすぐに遠くに消えた。川にかかるちよつとした橋のたもとでは、水面に映る太陽の激しい反射に目を奪われ、その瞬間にようやくはつきりと目をさまし、すぐに歩いた距離の分だけ疲労感に襲われた。ああまったくなんで歩いているのだろう、というものが思考の断片にあっただけけれど、深呼吸をして体を伸ばすとまだまだ歩こうという気分に変わり、とりあえずは朝の世界を満喫するために駅前の公園へと向かった。通りには早くも、パン屋と洋風の店名がついているお洒落なカフェが開いていて、カフェにはコーヒーの香りに釣られて数人が入っているようだった。四方から確認できるように三面に時計の貼り付けられている時計台は六時前を知らせ、その円形の時計の向こうはもうはつきりと明るく、同じような形の雲がちらほらとあった。そこからまたしばらく歩いていると、近所に住む木田原さんの旦那が煙草片手に犬の散歩をしているのが見えた。青のジャージ姿で腹が出ているのがよくわかる。彼とは歳の差がずいぶんありそうで、いつか私もあんな腹になってしまうのか、と小菅は思い、じっと見ると、犬の散歩をしているというのに彼の手には袋類がなく、きつと犬のフンの始末はしないのだろう、しかしそれをどうこういうわけではなくて、自分が踏んでしまったら嫌だな、ということだけ考えた。人は見られていると視線に気づくものなのか、彼はこちらを振り向き、顔をほころばせ近づくと、頭をさげて「ライターがないんですかね？」とポケットから出して見せた。きつと、そ

れが彼の考えたきつかけなのだろう。小菅はあれこれいろいろがめんどつくさく、素直に甘え、煙を吐いた。

「景気はどうですか？」などと彼は聞いた。穏やかな休日の朝だというのに！　と小菅は内心あり、ブラッシングされていけないせいで抜けた毛がそのまま絡みついている薄汚れた犬を、よしよし、となでながら「犬を飼う余裕はありませんねえ」と答えた。

「ペットがいると心がずいぶん落ち着きますよ」

「それはよく聞きますね、でもまあ、私は家族といることで満足していますから」

「いいことですね。うちの嫁はいつもふてくされて、私なんか邪魔者扱いですよ」とふつくらとした顔で笑顔を作り、頭をかいた。

「だったら犬はともかわいいんじゃないですか？」

「こいつだけが理解者ですよ、はは」

「ならトリミングはしてあげたほうがいい、皮膚病になりますよ。テレビで確かそういつてました」

「こいつにですか？　無駄な金ですね。まあブラシくらいは通してやりますよ。ブラシくらいはね」

小菅には、彼がどうもほんとうの愛犬家のようには見えず、今日のすべてが無責任に映り、苛々とした。なにか一言いつてやりたかったのだけれど、こういう無責任と利己主義を併せ持ったタイプの人間はいろいろと根に持つのだろうと考えてやめた。犬が、吐く煙草の煙を吸いたがったので、小菅はゆっくりと立ち上がった。

「それじゃあごきげんよう。たまには寄り合いに顔を出してくださいよ、婦人連中が怖かったりしますけどね。まあ美味しい酒がありますから、男性陣はそちらで盛り上がってますよ」と彼のほうが先に、そして少し気取ったような態度で犬を引っ張っていった。彼の向かう方向からは次第にサラリーマンの姿がちらほらうかがえ、皆表情が一緒のように見える。一人、背が高く鋭い眼光の男がいたけれど、そういうのはきつと刑事なのだろうと勝手に思った。設置されている灰皿の元へ煙草を捨てに行き、それから娘と家内のことを

生涯ほつたらかしたまま歩き続けたくなった。それは暖かさのせいで、陽を受けた血が身体から疲労を取り除いてくれたような感覚もあったからだ。しかしどうにも腹が減ったようで、それに、やはりそろそろ目を覚ますであろう家族を心配させるわけにもいかず、「今は家内の健康がなにより大切なんじゃないのか」と帰り際に店で卵とベーコンだけ買って、起きたら二人に食わせてやろうと考えた。

家に着くと部屋は静かだった。すぐに家内がおりてきて眠そうだったものの、もう体はなんともないのだろうと思える明るさもあり、すべては杞憂だったと考えられるようになった。

「顔を洗ったらそこに座ってテレビでも見てるといいよ。久しぶりにね、今日の朝は作ってあげよう。ベーコンエッグと、トーストは苺ジャムでよかったかな？」

「あら、ありがとう。それでけっこうですよ。でもコーヒーを忘れないでね」

「いいね、とても元気だ。そうやっていまは甘えてのんびりしているといいよ」

小菅はそういつて台所に立ち、さっと料理を始めた。湯気と心地のよい油のはじける音が窓に差し込む光とあいまって、優雅さがあふれた。コーヒーはインスタントだったけれど、皿を置いた背後のテーブルの上だけは一流ホテルのモーニングのような雰囲気があるように小菅には見え、娘にも早く作ってやりたくなった。

「こうやって優しくしてくれるんでしたら、一生病気でいようかしら？」唐突に家内はいった。

「おいおい、冗談はやめないか。いつだってお互い差さえあってるんだから、みんな苦労しているんだからさ」

「わかってますよ、ちよつとね、やっぱり心も疲れてたのかもしれないわね。でももう大丈夫ですよ、この玉子の味だってしっかりわかりますから」

しかし家内は深い嘆息を漏らしたようだった。

「そうか、それはよかったよ。しかし……普通に暮らしていて突

然痛みや恐怖はやってくるんだな。前置きもなしにさ」

暗然とではなく、テレビを見ながら番組の感想でも述べるようにさりりといった。

「そうねえ、これからはちょっとは健康に気を使って健康食品でも摂ろうかしら」

「どこの人でも、なにかあつてからそうやって行動に移すんだろ
うな。べつに悪いことじゃないけどね」

ゆっくりと平らげる家内の顔を見ながら、「さて、少し早いか
もしれないけど娘を起こすかな」と腰をあげた。

「怒らない？」

「ドアはあけないさ。もうすぐテストなんだろう？ 早めに頭を
回転させておいて、学校の授業内容をぎっしり詰め込んで、絵の
ほうをしっかりとやれるような環境を作らなきゃね」

階段をのぼると「すぐに下にいくから」と娘は起こされる前に
目を覚ましたようだった。すぐに起きあがるような音が聞こえたの
で、「今日は父さんが朝食を作るから、早くおりておいで」と一言
残した。

テレビをつけて朝のニュースを退屈しすぎ程度に見ていると、
昨日の夜の心配からとき放たれたらしい表情をした娘が「おはよう
と快活にいった。それでも体調を心配してか家内の顔をじつと見続
けているものだから、「どうだ、手は冷たくなるか？ ならないだ
ろう？ もうなんともないんだよ、いつもと変わらない日々の再開
さ」といつてやった。家内も「もう大丈夫よ、香奈子が一番心配し
てくれたのね。ありがとう、おかげで元気になったわよ」と娘の顔
を見て笑った。

「しかし、女つてのは正直だな。じつと顔なんて見つめ合つて、
照れないのかねえ」

「なによ、お父さんだつて珍しく朝食なんて作つてさ、いいじゃ
ない大切な家族なんだから」

「そうかそうか、そうだな。じゃあその大切な娘のためにベーコ

ンエッグを焼いてやるう。飲みものはコーヒーでいいのか？」

「うん。たまご食べるから今日はパンはいらないよ」

「だめよ、ちゃんと食べなきゃ。朝食は一日のエネルギーなんですからね」と家内がいうと、「じゃあそうする」と今日はやけに素直に従ってみせた。小菅が台所に立つとすぐにテレビのチャンネルは変えられたようで、居間からは明るい音楽も聴こえた。だれに自慢のできるような料理をしているわけでもなく、ほんとうに簡単で火を通すだけのものだけれど、それでも、そんな簡単なことであるうとも、普段なにも作らない者が作るということは、それだけで家族の絆を深めるのだと実感した。しかし絆なんてものは、結ばれた者同士を盲目に縛り付ける手錠でもある。強ければ強いほど閉鎖的に排他的になり、観念はずれ、自身と社会とのあいだに歪をもたらせる。その世界は狭く、例えば家族の場合、やがて世間から孤立し、なにかにつけて白眼視されるだろう。それはたんに、人の幸福が嫌いというものであったりもするのだけれど、絆が外に敵を作るということには間違いはない。小菅はそんなことを考えながら、できたベーコンエッグを皿に盛り付け、娘の前に置いた。すぐに口に運び出したのであわててコーヒーを作るハメになった。

「落ち着いて食べないと喉に詰まらせるぞ」

「うん、でもお腹空いてたから」

「今日も絵の勉強で遅くなるの？」

「えとね、今日は絵を休もうと思ってるの。テストもあるし、夕食を一緒に食べたいから」

「珍しいのね。じゃあなにが食べたい？ なんでもいってちょうだい」

「あまり無理はしなくていいぞ」

台所でコーヒーをかきまぜながらいう。

「んとね、ハヤシライスとトマトが食べたいな」

「あら簡単なのね、それだけ？」

うん、と返事をし「ただ一緒に食べたいだけだから」とつけた

した。

べつに今まで家族でいがみ合っているとか会話のない生活とかがあったわけではないのだけれど、娘のちよつとした心変わりというか家族と過ごそうという気持ちを手にとるようにわかり、小菅は少し優しい顔になった気がした。

平穏と少しの幸福感、私の求めていた家族とはこういうものだった、思いやりがあつてみんなが安心できるそういう生活だ、と小菅は二人を抱きしめたい気持ちでいっぱいになった。家族で食事をとることがいかに重要なのかを今また気づかされ、晴れ晴れとした感情が心を満たした。いつしか世の中は利便に酔うようになり、いや、それは人間としての欲求なのかもしれないのだけれど、小菅はふと考え、「弁当を作るのをやめないか？」と即座にそれを撤回した。というのも、小菅の心に一瞬だけ他人の幸せを破壊しているような感覚が生まれたのだけれど、弁当を買うのは大抵、昼休みの社会人で、他人の家庭にまでは入り込んでいないと思いなおし、そしてなにより傲慢に感じた。それぞれにそれぞれの幸せがあるのだから介入する余地なんてものはないように思えた。

「ところで、テストはいつからだ？」

「もうすぐ」と口をもごもごさせながら適当に答えたようだ。

「今の学生は大変だな。父さんの時代なんてのはね、田舎だったせいもあるかもしれないが、中学を卒業したら働く友達が多かったんだ。まあ、父さんは大学へなんとなくいったけれど、ご覧のとおりなんの役にもたつちやいない。経営学を多少習えばよかったのかもしれないが、歴史が好きだから文学部だったしね。商売のことはあとから学んでも遅くなかったね。その点でいえば大学は無意味だったかもしれないな。つまり思うんだよ、進むべき道を決めて、そのために勉強し、それを生かすことができなければまったくの無意味だと。そう思わないか。父さんの学んだ西洋史がいったいなんの役に立っている？ お前の宿題の手伝いか？ 笑っているけれど、私はお前に教えるために歴史を学んだと思えるかい。いいたいこと、

わかるだろう。例えば、人生経験や社会の仕組みを知るといって得るものは多いとか、卒業論文を書くことによつて論理的な思考と会話ができるとかいう人がいるかもしれない。だけどそれはだれにでも当てはまることじゃないし、学業を生かしている人より無駄な時間だったと思える人のほうが何倍もいるはずだと思う。今は専門学校が様々にあつて道を選べるけれどね」

「でも、ほんとうに大切なことつてあんがい気づかないものじゃないかしら。学んだことなんてずいぶんあとになって、役に立っただな、と思えるものなんじゃないかなつて」

「なるほどね」

小菅は頷く。

「にじみでる教養は自覚のないものほど磨かれているけれど、しかし、大切だったとあとになって気づくということは、その瞬間に大切だと認識できたということ、過去、その当時には大切じゃなかったということだろう？ のちに生かされるまでは土の下で何年も眠っている幼虫みたいなものだよ。自分の足はなにも考えずに土を踏み固めていく。成虫しようがしまいがどちらでもいいんだ、そのときはね。四年で学んだことのほんの少ししか生かせないというのなら、それは無駄なことなんだよ。無駄だったな、とあとになって気づく」

「ううん」と娘は頭をひねらせた。

「わたしは大学へいってませんけど、青春とか、大学は遊ぶ場所とかいうでしょう。そのとおりじゃなかったの？」

「青春ねえ……。小さいな、四年の中にある青春とはなんて小さいんだろう。しかし遊んだことは確かだったよ。でも、どこかみんなから一歩引いている自分がいて、心底楽しんだという記憶はないな。なりたいたいものもなかった。なぜ大学にいつているのか不思議だったよ。今でこそ無駄だと思えるけれど、当時はもしかするとそれなりに楽しんでいたのかもしれない。いや、違う。自分を探していったんだと思う。なにがしたいのか、なにをすべきなのか、それを探

していた。もしかすると大学は時間稼ぎのための世間体だったのかもしれない。やがてお前と出会って店を引き継ぐことになったけれど、それも成り行きだったからなあ。未だにやりたいことは見つからないままさ」

「目的もなく大人になるのって辛いことよね」と娘が達観したようにいった。「あたしはなんとしてでも絵で生活していけるようになりたいし、っていうか、なるわ。絶対に。あたしにはそれしかないもの」

「はは、頼もしいかぎりだよ。立派、立派」

「ねえお母さん、そこでお願いなんだけど、もうちょっとだけお小遣い増やしてくれない？」

「あら、唐突になによ。足りないの？ もう十分にあげてるでしょ、アルバイトだってしてるのに」

「それでも足りなくて。これ以上バイトは増やせないし、画材だって安くないし、節約だって目いっぱいしてるし、ケータイだって欲しいけど我慢してるし、だからお願いっ」

両手を顔の前で合わせ、実に女の子らしい仕草と目配せで懇願した。

「まあいいじゃないか、これもさっきの話を聞いて将来のことを考えた上での結果なんだろうよ」

家内の目を見て小さく二度頷いた。

「もう」

そのふくれた顔が少し、娘に似ているように見えた。

「あ、もうこんな時間！」と前言を撤回されないようにするためか、了承を得るとすぐに慌ただしく登校の準備を شدした。

「お母さんありがとうね」

娘が登校し、少し静かになると、ただのんびりしているだけのいつもと同じ休日の過ごしかたがなんとなくもったいないような気になり、とくに趣味という趣味もないのだから、たまには家内と出

かけるのもいいかもしれないと言誘ってみると、「わたしはけっこうですよ」とつれない返事があった。出かけるといつても、とくにいくあてもなかったので内心ほっとし、それならのんびりとテレビに耳を傾けながら怠惰に過ごそうと考えた。家内はときたま友人らと食事に出かけたり、映画を観にいったりすることもあって、しかし小菅には友人と呼べる友人はいなかった。いつ友人を失ったのか、高校を出てすぐだと思い出し、記憶に生きている過去のクラスメイトたちや、自分の人生を思うとなんともいえない気分になり、孤独は嫌いではなかったものの、それでも一人くらいはどんなことでも語り合える友人を欲していたようにも思う。しかしこの歳になり、家族を抱え、そこに安閑がある今は、強烈な悩みという悩みもなく、生きがいがだけがあつて、やはりそうなのだから家族に囲まれているということを幸せに思うべきだ、といたった。そもそも友人とはいったいなんなのか、気分転換の道具？ 知識や快樂といった刺激を与えてくれる存在？ それとも助け合いお互いを成長させる仲間か。私は過去、友人になにを求めた？ 小菅は考え、独り、沈黙の世界へと入っていった。

きつと皆、友人になにかを求めている。希望であつたり安心であつたり。他には金銭的なことがあつたとしても、それは結局精神的なものへとつながる。ある程度得られるものがあれば友人で、なくなればいずれ友人でなくなるような気がして、そうなるとやがて疎遠になっていくのだと思う。私は友人の大切さやかけがえのなさというものに気がついたことがない。いや、もとより、人と人との関係は、だれしもが希薄なはずだ。友人とは所詮、時間つぶしの道具ではなからうか。なぜなら、私も少し前までは、休日になると前の土地に戻って親しかった電気屋の主人とたあいのない話でもしようか、などと考えていたのだから。

よく、友人になんでも相談してしまうという話を聞く。家内もその一人だ。しかしカウンセラーでも家族でもないただの人間が、ほんとうに親身になって答えてくれるのか、といえ、あたかも真

剣を装って知った風な口をきき、適当な返事とくだらないアドバイスをするだけの陳腐な三文役者ではないか。そこに責任や経験はなく、そして心の奥底では甘い蜜を期待しているのだ。その点、相談されるのを職業にしているカウンセラーは立派な花形だ。相談に乗ることでおひねりだってもらえるのだから。

小菅はそう考えているものの、それを娘や家内にいうことは絶対になかった。それは世の中には友人の多いタイプの人間と少ないタイプの人間がいて、それぞれにはそれぞれの考えがあるだろうし、なにより、友人がいないということはなんの自慢にもならなくて、ときにはバカにされたり哀れみの対象になってしまったりもする少し悲しい存在でもあるように思ったからだ。しかしそのことに関して本気で悩んだこともなく、流されるがままだった。

家族のある今、ここに安息のある今、小菅に友人は必要なく、これが小さな一人の男のあるべき姿なのだ、と理解した。主義や理想などという大層なものももういらないのだ。今ある小さな幸せに満ちた生活という現実をただ続けるのみだった。平凡こそが最大の幸福なのだ、そう考えたあと、店をのぞき、簡単な整理をした。外では今夏、ようやく蝉が鳴き始め、次第に呼応されるかのように騒がしさは増した。年々、鳴く時期が遅くなっているような気がして、自然がこの街からもなくなっていくているのだらう、と考えたのだけれど、安易な発想だな、と自嘲した。

家内はどうやら部屋に掃除機をかけはじめたようで、少しの憂いはあつたものの、とても力をいれて掃除機を唸らせているようだったので、一度だけ微笑し、気分転換のためにした作業を終わらせ、煙草を続けて二本吸った。漂う煙の穏やかさが今の小菅に安心とともに沁みこんで来、この紫色の煙がなぜ壁や天井を黄ばませるのかと思ってしまうほどだった。

昏前に郵便配達バイクが来て、ポストに何通か届けてくれた。見ると、保険の案内や娘あての葉書、それに、母からの手紙もあった。一週間に一度のペースでこうして送られてくるのだけれど、電

話でなく手紙ということ、不幸の報せではないのだからいつも安心して読むことができた。内容は日記を他人向けに書き変えたような簡単なもので、無事ということ、父の耄碌の度合いのみが書かれ、最後に挨拶と返事はいらぬといつもものようにあった。だから小菅は今まで返事を出したこともなく、ただ綴られている内容に納得だけをしていた。なにもしたためずとも盆と正月には帰省するのだから、それで十分だと考えていた。それに、実家の近くには世話好きの医者が住んでいて、安心だっと思っていたのだから。この歳になり、子を持つ親の気持ちは十分に理解したのだけれど、老後を二人静に暮らす者の気持ちはやはりわからなかった。ただ、衰えたな、という感想だけがいつも、冷静に送られた視線の先に映ってあるだけだった。それはもちろん、子としては見たくない親の姿で、最初にそれを感じたときは、人の生きる意味、老いて尚生きる意味というものを考えさせられた。小菅は若かった頃に、自分はきつと歳をとる前に自殺するのだろう、となんとなしに考えていた。それは、老いに対する不安や恐怖からきたものではなく、単純に愚かだったというだけのこと、しかし今はそんな気持ちは微塵もなく、代わりに、ほんの少しの恐怖と不安がたまに押し寄せてくるのだった。それは決まって母から手紙が送られてきたときだ。

小菅は恐怖を克服する術を知っている。何十年も先のことに対しては考えずにいれば済むことで、それ以外に、身を包み震え上がらせる恐怖を克服するためには、その恐怖の先を知ることだということだと考えている。人は恐怖を拒絶するからいけない。好感を持つて接するべきだ。その後にとこへいざなわれるのかと期待するべきだ。しかし、先をしればいいといっても、先のない完全な終末である死の恐怖というものからは逃れられないのだろうとは考えていた。死の恐怖の克服は、もしかすると受け入れることや諦めることも可能なかもしれないけれど、やはりそれは克服ではなく、一種、仏教的な諦観かもしれない。そうやっていろいろと考えている最中は人の動きがやたらと気になり、あくせく動く家内にほんの少

しだけ苛々とした。もちろん、体調のことは心配で、だからとやかくいうことはしなかったのだけれど、小菅は独りになりたい気持ちに駆られていた。独りになるといろいろと考えすぎ、だれといえるよりも精神的に疲労するということはよくわかつていることで、ゆえに人は友でなくとも人を求めるのだらうということもわかる。だから私は家族を得たのだ。すると、独りになるということに幾許の不安を覚え、目に映るものすべてが少し歪んで見えた。まったく自分の心は複雑で曖昧だ。自分にすらわからないのだから、自己というものはおそらく、もろい船に乗せられ、最下流まで周りの景色を嫌でも見せられ続けていくだけのものなのだろう。ただ、左を見るか右を見るか、もしくは空を見るかという小さな選択ができるだけだ。見えるのは醜いものばかり。目をえぐればどれだけ幸せか。流す血はきつとだれもが黒に違いない。私はただ、小さな幸せと正しさの中で生きていたい、とそう願った。家族を守り、偽善や深い欲望、社会に惑わされず、ただ一つの笑顔と精神的な余裕、静かな世界を求めよう。一度きりの人生で人は大いに間違いを犯す。それは、自己の利益のために自分の心を欺くことであつたり人を虐げることであつたり。

すべてが共存できない今、神なんてものはどこにもおらず、悲鳴こそが人の終着点だ。神という幻はもはやどこにも必要はない。だけれど、小菅は、最後まで家族を愛し、清廉に生きてみせよう、と深く深く考えた。しかし、まさかあれほど自分自身が穢れてしまおうとは、このとき、微塵も思つてはいなかった。

小菅自身、ずいぶんと時間が経つたような感覚があつただのだけれど、時計を見ると一日はまだまだ長いのだと気づかされた。テレビの中の人たちが真剣な面持ちでなにやら語っていて、注意をそちらに向けると、すぐに笑いが起こつた。真面目な表情をしたり微笑んだり、とても忙しそうで、顔が痛くならないのか？ と不思議に思つたくらいだ。調子の良さそうな出演者たちに嫌気がさし、テレ

ビを消す。二階から掃除機の音が聞こえた。掃除が終われば昼食になる。いつもの休日だ。届く音は一定。すぐに忘れてしまいそうな抑揚のない音。なにを吸い込んでいるのかもわからない。まるで一箇所にとどまっているかのような。なぜなのだろう。いつから？

ずつとだ。もうずつと同じではないか。刹那、小菅の脳裏に不安がよぎった。まさか。ずつと、同じだった！次第に鼓動が早くなる。呼吸が重くなる。はつと立ち上がり小菅は階段を駆けのぼった。

「麻子！」

そこには、畳の上に倒れている家内の姿があった。狼狽し、体を揺する。

「おい、しつかりしろ」

呼吸はしておらず、意識もないようで、触ると、鼓動も脈も感じられなかった。すぐに救急車を呼ぶ。オペレーターに聞かれたことをゆつくりと落ち着いて考えながら返事をし、会話の途中に、掃除機の電源を切らなきゃうるさいままだな、ということ考えた。

電話を切り、掃除機の電源も切る。横たわる家内のそばに膝きながら、いつから心臓が止まっていたのだろう、確か、五分が心配蘇生の成否の境目だったように思う、といったことや、そうなのだとしたらもう駄目かもしれない、ということを考え、色を失っていきようにも見える顔にそつと手を伸ばした。そのとき、ふと恐怖した。もう、死んでいるんじゃないのか、心臓が止まっているのだから。これは死体じゃないのか？小菅は胸から込み上げるなにかを感じ取り、叫びたい衝動に駆られ、しかしそうなると気が狂うに違いない、とどこか冷静に判断もした。その冷静さはすぐに自失へと変わり、なにも考えることができなくなった。

サイレンが聞こえて、救命士の問いかけや、運ばれる家内、除細動機で電気ショックを与えられる姿、エコーのかかる声、視界のほとんどがぼんやりと歪んでいて、はつきりとしていたのは近所の住人らの、木に貼り付けられたかのような薄皮の表情。

小菅はなんとなく問いかけられ、そのたびに「はい」と薄弱なまま答えた。

ぐるぐると回る赤いランプの反射光が見える。サイレンが他の車を停止させる。まるで一つの権力者のようだ。救命士のヘルメットがなぜだか気になった。車内でよく頭をぶつけるのだろうか、それならもちろん必要だ。人を助けるのに自分が頭を打って大怪我をしては意味がない。でも家内はもう助からないだろう。それくらいのこと、彼らの必死な表情を見ていればわかる。

「先日ね、家内は病院にいったんですよ。詳しく聞かなかった私も悪いですがね、なんともないと医者はそういったそうです。家内がどんな病気で今この状態になったのか、素人の私にはわかりませんが、採血や症状を聞いて少しでも判断できないものなんですかね？ 土偶に話したわけじゃないんです、医者にですよ！ もっとも、家内が症状のすべてをきちんと話したのかどうかなんてわかりませんよ。でも、そんなことを疑うよりも、やはり疑われるべきは医者の方でしょう！ 心臓病で急死だとしても、薬だつてあるじゃないですか。最初に医者がそれを処方してくれていたらきっとこんなことにはならなかったはずなんじゃないですか？ ねえ、そう思いませんか！」そこまでいって、ふつふつと込み上げるものを感じ、自分はこのあと、これ以上に叫ぶのだろうと思いつと口をとめた。

「この状況ではなんともいえません。まだ助かる可能性はありません。どうか落ち着いてください」

三十半ばに見える、清潔な隊員が、目に力をいれて小菅を一瞬だけ見つめた。小菅は手を握ったり開いたりし、いい加減でなんの保証もない気休めがいったいなんになるのだろうと考えた。

病院に着くと家内を乗せたストレッチャーが慌しく搬入され、小菅は係りの案内に従った。ベンチに座り、塞ぎこむと、家内を診た医者のことがすぐに頭に浮かぶ。どんなやつだろう、藪医者と怒鳴りつけたい気分にもなったけれど、それは、なにもせずなにもできなかつた自分に対してのいい訳でもあり、だれかのせいにするこ

とで自分を正当化したいという心理なのかもしれないと考えると、そんな自分が嫌になった。

辺りを見回すと、昼だからだろうか、少し遠くの通路には人通りも多く、院内は雑然としていることに気づいた。子供が母親の足元に不安の面持ちを浮かべながらしがみついている、かわいらしく思える。とりあえず学校に電話をし、娘に病院にくるように伝えてもらった。

数分後、医者が近づいてき、旦那だということを確認すると、「残念ですが、亡くなりました」と伝えられた。数秒の沈黙のあとに、そうですね、と答え、窓から差し込み床に落ちる陽の明かりをじっと見る。床の細かいくつもの傷が笑っているように見えた。

「じきに警察の方がきていろいろと聞かれると思います。すぐに検案書が書かれるでしょう。それでは私は失礼します」

去る白い背中を見ながら小菅は、いったい医者は何をしたのだろう、とうの昔に心臓が止まって死んでいたのにいまさら亡くなりましたなどと、亡くなっていましたじゃないのか、運ばれてからの数分は、最善を尽くしましたといえるようにするためのたんなる間でしかないのだろう、と薄笑いを浮かべた。しかしそういった医者に対する疑問も、家内の白くなった顔を見るとすぐに悲しみに支配されたのだった。

やがてやってきた刑事にくどくどと訊かれ、妙に構えてしまった。

これから、親戚筋にも電報や電話で報告をしなければならなし、葬儀屋とも話をしてあれやこれやと忙しくなることを考えると、それだけで気が重くなる。世間がしているようにあわせると、正月や盆でも会わない親戚がやってくるのだから悲しみより気苦労のほうが絶対に多くなるのだろう、と少々うんざりした気分になり、身内だけでなんとかひっそりとやれるように話をつけようと考えた。

死因は狭心症ということらしかった。霊安室は重苦しい冷たい

空気が漂っていて、いかにも死人にふさわしかった。コンクリートの床もなぜか物悲しさをさそう。なんと布をとって家内の顔を見ても同じで、ようやくこの先の生活のことを考える余裕も少してきた。突然な死ではあったけれど、もしかすると最初に苦しんだときにある程度の覚悟はできていたのかもしれない。そうでなければこれほど落ち着いていられないのではないか、いや、これから娘と二人で生きなければならぬと考えると、恨めしくさえ思ってしまうこともあり、近くにいた人ほど、亡くなったときに悲嘆、憎悪、絶望と様々な感情が呼び起こされるのだと気づいた。友人の死なら悲しみだけで済むのだから。

じつと、蠟燭の小さな炎を見ていると消えそうなほど大きく揺れた。娘が扉を開けたのだった。顔を見ると今にも泣きそうで、だから小菅はなにもいわずに霊安室を出た。泣き声が聞こえない喧騒を求め、人が多く行き来する入り口の外で煙草に火をつける。娘を見たせいか、手が少し震えていた。ぐっと目を閉じ、力をいれ、内からすべてを包み隠してくれといわんばかりに、深く、深く肺を煙で満たした。そしてなんどもなんども大きく息をいれた。灰色の煙のスクリーンに、せめて心の中にだけでも家内の生きている姿が映らないかと。

陽が落ちる頃までに通夜と葬儀は義妹らと話をつけ、小数の身内だけでひっそりと行う密葬にすることで落ち着いた。知らぬ親戚や近所の住人らがこないということはとても気が楽でいい。

斎場についてからも娘は目の下を腫らし、ただうつむいてときおり鼻をすすっていた。小菅はどう声をかければいいのかもわからず、変に慰めても余計に悲しませるだけだろうと思い、ただそっと一人にしておいてやったほうがいいのかもしい、と言葉を一つも与えずにいた。

せめて、あ のとき、家内の生きているあ のときに別れの言葉でもいえていたのなら、と考えたけれど、それはただたんに自身を

納得させるための、いわばあとづけの呪文のようなものだと思い、例えば、あのとときにああしてやればよかったという言葉と持つ効力は同じで、死者にとってはどうでもいいことじゃないか、と思いなおした。

天国にいった、幸せそうな顔、未来があつたはず、まだ生きてかつただろう。義妹らが涙に咽びながら口々にいった。いったい、死者でない者になにがわかるのか、そんな言葉は氣隨に満ちて無責任で、空言もいいところだ。なにも話さずじつとしている娘の方がよっぽど理解しているではないか、と小菅は内心いきり立った。

「死ぬにも順番があるだろうに……。あたしが先じゃないか」と家内の母がぼつりと漏らした。

「そんなことをいってはいけないよ」義兄がすかさず入る。そうやってお互い慰めあっているようだった。だけれど、だれも小菅には挨拶以外の言葉をあまりかけなかった。それは小菅から痛哭するようななにかを感じる事ができなかったからかもしれない、自身でも気づいてはいた。どうやら心を見せまいとすればするほど、冷淡で冷血だと思われるようで、しかしそれならそれでなんらかまわす、もともとひっそりと内心で家内を送るつもりだった。死者を送るのに必要なのは言葉ではなく心だと考えていたのだから。「さよなら」すらも必要じゃない。それに、死ねばそれで終わりと考えていて、しかし、なぜだか、今の心はそれに納得してくれない。胸になにかが詰まるような、やりきれない、なんともいえない感覚が絶えず小菅を包み、少しでも油断をすると目が潤むのだった。

「お父さんの背中、丸く見える……」

娘がようやく話した言葉がそれだった。娘に心のすべてを見透かされたような気がして、身体が震え、途端に涙があふれそうになった。女は余計な一言でいつも男を確かめる。だから、きつと疲れただんだと思う、と誤魔化すしかなかった。それに絶対に人前では泣きたくなかった。娘が話しかけて、ようやくほんとうに家内が死んだのだと理解できたのかもしれない、今まで現実から逃げていたとい

われればそうかもしれなかった。

しばらくして両親がやってきた。二人とも神妙で、しかし父に
関しては老いをさらに感じさせられ、焼きりんごのような赤黒い、
皺だらけの顔に、八十三という年齢の深さを思った。

母が親戚らと挨拶を交わしたあと、「ああ、なんとという不幸な
ことでしょう」と小菅に嘆くように近寄った。溜息をつき、静かに
頷く。疲れたろう、とだけいい座布団を渡し、娘が顔をくしゃくし
やにしながらもお茶を勧め、そのあとに小菅が道程を軽く聞いて二
人を落ち着かせた。なにも、わあわあと次から次へやってくる親族
たちの（といつても数人だけけど）、悲しみの連鎖の大合唱を聴き
たいわけではなく、ただしめやかにその場に黙座し手を合わせてい
ればそれでいいと考えたわけで、しかし実際はそういうわけにもい
かず、破裂した水道管から水が噴き出すかのように慟哭する者が少
なからずいて、いや、その一人の存在が意外と他者の正気を保
たせていることをこの部屋で悟った。義妹の心は一向に落ち着く様
子を見せず、静かになってきたかと思えば、ふとしたきっかけでま
た頭を振り乱して大きく泣き出すのだった。それが長い時間続いて
いて、むしろ義妹が不憫に思え、いったいこの集まりがなんの儀式
なのかもわからなくなってしまう一瞬がある。そういつたちよつと
した心の変化はきつと葬儀には必要なのだろう。そうでなくては人
間を疑ってしまう。悲しみだけに暮れるなんて、そんな不器用なこ
とができるのは、殺人を偽装する芝居をうつ者だけだろう。義妹は
最初、私に対しなぜこんなことになったのかと問いただし、処置が
遅れたのではないかと責め立ててもいた。当然といえば当然かもし
れず、自身さえ医者を疑ったのだから、気の済むまでいわせてやれ
ばいいのだとそのときは静かに聞いていた。

「突然の報せで、なにを話せばいいのかもわからず失礼しました。
私も母も少し落ち着きましてね、妹は未だあのとおりですが、どう
です、外で少しばかり話しませんか？」と義兄の邦広さんがいった。
軽く頷き、斎場の広場に出る。辺りは暗く、思わず時計を見ると八

時をさしていた。なにを話すのかと考えながら煙草をくわえ、疲労感と一緒に煙を吐き出すつもりで煙をまいた。彼は一分ほど頭を抱えたり頬をなでたり、しきりに手を動かしながらふと顔をあげてはまた視線をさげて、因循な態度のまま、突如「まあ、その……」と呟いたのだけれど、それに言葉が続かないようでもとでもじれったく思えた。こんなときにいったいなにをいうことがあるのだろうか、と小菅は疎ましささえ感じだし、火種の燃え具合をしきりに確かめてばかりいた。なにもありやしないんだ、それなのに紳士を気取って外に誘い出して、まったく浅薄で滑稽じゃないか。

「まあこんなときにあれなんです、遺書ですね。あいつは書いていましたか？ ほら、あとあと問題になる前になる程度は事前に話しておかないともつれることになるかもしれないから」

ああなるほど、要するに金のことか、と気づき嘲笑した。

「そんなもの、書いてませんよ、だから心配は無用ですとも。保険はすべて『こちら』ですから。そんなことを聞きたかったですか？ 大した資産もないこの家族を見ても？ あわよくば数万でも欲しかったとそういうことですよ。下賤ですね、家内と同じ家で育ったというのが不思議ですよ」

こういう人間がもっとも蔑むべき人種だと小菅は考えていて、それなりの返答をした。

「確かに聴こえは悪かったですね。その言い分はもっともですよ。しかしちよつとした金でももつれるものなんです、現に経験しました。だから軽蔑されようとも確認は怠らないようにしてらんですよ。だれかがいわなきやいけない。まあ遺書がないなら問題もないんですがね」

「そうですね、なんら問題はありませんよ。話はそれだけですか？」

「ええそうですね」

小菅は苛々としたまま、踵を返した義兄を訝しげに見続けた。

彼の悲しみは芝居だったのだろうか、それはきつと違うだろう。

実の妹なのだから。そしてふと彼の婦人の姿が頭に浮かんだ。よく顔を見てはいなかったけれど、鋭く細長かった目に狡猾さがあるように感じられた。彼が婦人に籠絡されていると思ってみれば不思議と納得もできそうな気がして、今はそれ以上考えることはやめ、煙草をはじいた。

齋場に戻ると「帰るぞ」と娘を立たせ、「店のことがあるんで。明日の通夜にはもちろん戻ります。ここは設備が整ってますから寝るのにも苦労はしないでしょう。それではひとまず失敬させてもらいます」といった。

なぜか、皆一様に驚いた表情を見せ、母が「ちよつとなにをいってるの、あなたの奥さんでしょう!」ととめようとしたけれど、「べつに悪いことじゃないだろう、通夜は明日なんだから。あんたは遠いから帰れないが、近い者は帰ろうが帰るまいが自由だろう! それともなにか、打ちひしがれる亭主を演じ続けるとでもいうのか。それが喪主の務めとでもいうのか。そうすることが場にふさわしいと思っているのか。ならば、だれとはいわないが、家内の遺産の話などこんなときに出るのはおかしいと思わないのか! いいか? 私は、私は終始神妙にしていた!」という場がどつとざわめき、瞬間に非難されるのだろうと感じた。泣き叫ぶのが正しいのか、ここは悲しみの度合いを評価する場所なのか、納得させるために儀式があるんじゃないのか? と小菅は不意に考え、投げられる言葉を意に介すことなく娘の手を引き、追いかけてこようとした母を制して場をあとにした。

「おい、タクシーを呼んでくれ」

高ぶる感情のまま夜勤の係にそういつけ、明かりの少ない通用品近くのベンチに座り「なにか飲むか?」と娘に聞く。

「いらない……」

うつむいたままの娘を見て、なにかさっきのことを不満に思っているのじゃないかと気になった。しかしこうやってついて来てく

れることを考えると、やっぱり我が娘なのだな、と実感できる。話しかける前に一服すると、気分がいくぶん平静になり、聞く覚悟もすぐにできた。

「父さんは冷たいと思うか」

「うん……」

「そうか……そうだな」

この場所には、きっと私と同じ気持ちになった人たちが今まで何百何千と腰をおろしたのだろう。部屋からはかすかな泣き声が聞こえるけれど、ここは仄暗く、芝居小屋から離れてなにもものにも囚われることなくひっそりと死者を悼むことができるのだから。

そして小菅は膝に置いた手にある煙草の赤をじつと静かに見ていた。タクシーが到着したとしらせをもらい、「さあ」と娘を立たせ帰路につく。夜がすべてに落ちていた。

状況をわかつているのだろう、運転手は行き先以外たずねてはこない。窓を流れるのは色とりどりの光の川で、会話は一つもなかった。ふと小菅の顔がガラスに映り、輪郭をとらえる前に目をそらした。運転手に一言いい、窓を開け、風を浴びる。外ばかり見えていた。なにもないのになにかがあるような気がして、そこに、すぐそこに。

「これが、夜なのか」

「え？」

「いや、ただの独り言だよ」

「知りたい……お父さんの気持ちが知りたい」

娘は外を見たままだった。小菅はなにもいわず、また視線を外に向けた。風がきつかった。

家に着くと娘は黙ったまま部屋に戻った。小菅はなにも考えないようにするために商品の整理をし、シャッターに張り紙をした。住人らにはすべてが終わってから挨拶するつもりだけれど、きつとこの張り紙と救急車から様々な憶測をして、家内が死んだに違いな

い、と噂をするのだろう。密葬に関して理解してくれるかはわからない、店も続けられるのかわからない。とにかく、すべてが終わって、それからの生活で判断しようと考えた。

ふと、なにも食べていなかったことに気づき、冷蔵庫を開ける。ビールをとり、店にあてをとりにいった。なにも食べたい物がなくて、ビールだけを胃に流す。少しの熱さがあつたけれど気分はなにも変わらなかった。

ぼうつとして、しばらく視界への注意はないままで、それから急に思い立ったように階段を駆けのぼった。

「おい」

返事はなく、しかしそれでもよかった。

「いいか、明日は学校へいけ。休む必要はないんだからな」

そういい、すぐに戻る。煙草は吸わず、強く目を瞑った。いつもいるはずの家内はもういないのだと、居間の静寂が少し、教えてくれたような気がした。そこに娘がおりてきて、「なぜ？ なぜそんなことをいうの？」と訊いた。表情はきつく、目には哀しみがあった。

「勘違いしてるかもしれないな、いいかたも悪かったかもしれない。母さんのことがどうでもいいということじゃあないんだよ。通夜は明日なんだからな。葬儀の日には休むのは当然だし、ただ、眠ってしまふ前にいっておきたくて、それに、なによりもお前は学生なんだから、それを忘れてもらいたくなかっただけなんだよ、テストとか出席とかそういうのは全然関係ない。今すぐわからなくても、学校に行けばきつとわかると思う。父さんもお前と同じようなものだから」

「だからお母さんのそばにいちやいけないうつていうの？」

「そうじゃない。いいか、お前は母さんが死んだからといって絵を描くことをやめるわけじゃないだろう？ なるべく必要以外、死んだ者から離れて自分の先を想うことが大切なんだよ。悲しむのは

少しで十分だ。これからどんな生活が始まるかはわからない。空虚なもの少なからずあるだろうさ。さっきだ……さっきあいつは死んだんだ！ わかるか？ わかるか……？ さっきなんだ……」

そこまでいい、小菅は言葉を詰まらせた。嗚咽のようなものを感じ、娘に背を向けた。

「人の死の悲しみが、長い人生のたった少しのあいだだけのことだから、せめてその時間だけでも涙を流したいというのなら、明日は休んでもかまわないさ。それも一つのありかただから……」

娘は黙ったままだった。

「好きにすればいい」

静かに、なにもいわず娘は自分の部屋に戻った。なにかを食べさせてやりたいとも思ったけれど、私と同じように喉を通らないだろうと考え直し、コーヒを一人で飲んだ。苦味の強さなんてどうでもよかった。

不意に呼び鈴がなって、時計を見ると十一時を回っていた。

だれだこんな時間に、と訝る。のぞき穴から見ると、古田さんの旦那だった。表の張り紙を見て、いらぬ世話を焼くことを婦人にいつけられたのかもしれない。

「なんでしょう？」

「ああ、どうも夜分にすみません。うちの家内がどうしてもというので」とオウムのように首を動かして、頭をかいた。

なにもいわずにいると、どうやらこちらから話を切り出すのを待っているようで、なんとも苛々とさせられる。あの優秀な子をたくさん持つ家庭の長の出で立ちといえば、乱闘の直後のような乱れた白と黒の髪、夜でもわかる脂ぎった肌、力なく開いたままの口と太く赤黒い唇で、いくら糊のきいたスーツを着ていようと、なぜあれほどの子らができたのか不思議でならない。しかし、それは考えたくないことだったし、そして結局はどうでもいいことだった。

「奥さんがどうかしましたか？ なにをいわれたんです？」

「ええまあ、心配してるんですよ。なんでも、お宅の奥さんが救

急車で運ばれたそうで、それに、表の張り紙を先ほど家内が見つけたましてね。それで、余計なお世話だとは思うんですが、役員として訊いてこいってわけですよ」

「どうやら少し早く張りすぎたようですね。ご心配をおかけしてしまいました。しかし、役員は奥さんでしょうか？」

「そうなのですがね、こういう役はどうもいつからか自分がやらされるようになりまして、それで差し支えなければ容態といいますが、状況をお聞かせいただければと、まあそういうことなんですよ」

「そうですか……」

小菅はどう答えるべきか迷った。人が不幸の真つ只中にいるときに、それはもちろん彼らが知らないからだとしても、こちらからいずれ挨拶をするのに、こうやって遠慮しながらでも入り込んでくのが気に食わなかった。それも夜半に。だから、せめてこの間抜けそうな顔が驚きに変わるのを見てやろうと思ったのだ。

「家内はね、亡くなりましたよ」

「えっ！」

瞬間に目を開き、そして小さく、嘘だろう、あなたも人が悪いというような笑いを浮かべ、小菅を凝視した。どうやら、死んだとまでは思っていないかったらしい。小菅もじつと見返していると、途端にもじもじとし、「あ、そ、それはどうもお悔やみ申し上げます」とあわてて取り繕った。なんとなく汚らしい動物に見えた。帰ったそんな素振りを見せた彼に「葬儀は密葬にしますんで、このことは内密にお願いします。後日、近所の方々にはご挨拶しますので。いいですね？」と念を押す。

「え、ええ。家内にもよくいっておきます」と額ににじんだ汗をぬぐいながら去っていった。小菅は少し楽しい気分になり、あと一人くらい来てくれないかな、とさえ考えた。居間に戻るとすぐにその考えは消えて、また静寂と鬱々とした思いに包まれたのだった。

次の日の朝、店には商品が配達されていて、やはり張り紙だけ

で通じることはないのだろうと考えただけけれど、売り上げのデータがあちらのコンピューターに届かなければ、それなりに配達される品物も減るだろうと思い、そのままにしておくことに決めた。

娘が学校を休むといったので、「父さんはやることがあるから、家にひとりになるぞ」というとしばらく考えた様子を見せ、「それじゃあ学校に行くことにする」と不服そうな顔を向けた。斎場へくするための費用を渡し、見送る。

外に出ると空がすべてを青で包まんばかりの眩さを放っていて、太陽にあたると少しばかりの暑さを感じ、目を細めずにはいられなかった。

小菅には目的があった。それは、家内に対して「大丈夫でしょう」といった医者に話を訊きに行くことで、詰問する気は、今はもうさらさらなく、ただ確認と納得がしたかったのと、あとは、もし病院側のミスだったとしたのなら、同じことをくり返してはもらいたくないという願いがあっただけで、しかしそれも医者の態度次第だとは思った。

歩いて病院に着くまでに一服済ませ、自動ドアをくぐる。この規模は、家内が搬送された病院と比べるとかなり小さいものの、しかし、内科、外科はもちろん、それ以外にも充実していて、決して信用を疑うような病院ではないことは確かだった。

「あの、以前に家内を診ていただいた先生に会わせてもらえませか?」といい家内の診察券と保険証を渡す。

「どうされましたか?」

「まあその、家内が亡くなりましたしてね、それで先生にお話を聞かせてもらいたいわけです。診ていただいて、翌日のできごとですから」

「そうですね、少々お待ちください」

受付の中年女性はこういうことに慣れているのか、顔色一つ帰ることなくカルテらしきものを探し、それから受話器をとってなにより話をしていた。

「少しのあいだでしたらかまわないとのことです。どうぞおかけになってお待ちください」

その言葉に少し違和感があったものの、腰をおろし、院内を見回した。老人が多く、彼らの表情は笑顔意外どれも同じように見え、いつもなにかに困っている風にすら思えた。

しばらくすると名前を呼ばれ、四診と書かれた部屋に通された。髪を油で頭皮に貼り付けるほどびっちり横に流していて、その黒い舗装されたばかりの道路のような重さの髪と細く短い首とに挟まれて気難しそうな顔があった。

「どうも、お忙しいところすみません」

そう申し訳程度にいったのだけれど、実際は、こういった話をするのも医者義務だろうと考えていた。

「かまいませんよ、あまり時間はとれません。それで、診察後すぐにお亡くなりになられたそうで、死因はなんでしたか？」

「ええ、狭心症です。これはどうなんでしょう、診察ですぐにはわからないものですか？」

医師は、なるほど、という顔をして見せたあとすぐに唇を親指でなで、「わかりませんね」といった。

「でも、症状を訴えていたでしょう？ それでなぜ判断できないのです」

「狭心症は採血ではわかりません。心筋梗塞やまあ俗にいう心不全ですね、それらを疑ってみましたが、もうしばらく様子を見るつもりだったんですよ。まさかそれほどすぐに亡くなるとは、残念ですが、もしなんらかの処置をしていたとしても助かる可能性は低かったでしょう。いや、もう寿命といってもいいかもしれません」

「そこまでいいきれるものなのですか？ 確信をもって」

「ええ、私は医者ですから。二十年間、十分に経験をつんでいるつもりです。抜かりはありませんでしたよ。それに、心筋梗塞ならあなたにもよくわかると思います。路上で発作に見舞われ、倒れたとしても、救急車を呼んだところでまず助かりはしませんよ。舌

下錠もありますが、診断を下されないことには……ね。まあ心停止でも偶然に高度な救命技術を持っている人が現れたのなら別ですがね。わかりますか？ 心臓の病で倒れたのなら諦めたほうがいいんです。だれも悪くないですし、だれもなにも責めやしませんよ。もちろん、医師に対しても同じです、ナンセンスですよ、まったくね」

小菅には、この医者が胡乱に思え、医療に対しての無知を悔やんだけれど、なんとなく慰め、諭されているような気もし、心がなぜか平穩になるのを感じた。きつと、私は納得したのだ、これでいいのだろう、これ以上なにもする必要はないのだ、真実こそが正義とは限らないのかもしれない、と決心し、医師の顔は見ずに「ありがとうございました」とだけ残してドアを出ようとすると医者が制止した。

「あ、ちよつと待ってください。まあ念を押すわけじゃないですが、どこの医者も同じことをいうと思いますよ。もしかすると、一般論となればなるほど答えるのを面倒だと思うかもしれませんがね。いや、なに、私が嘘をいつているというわけじゃなくてですね、ただ無駄なことをする必要はない、徒労に終わるだけだろうと、まあ、忠告という用語弊があるかもしれませんが、親しみです。そう、親しみですよ。こうやってわざわざ来てくれたことに対するね。それに、今後は他にそういった人を出さないようにさらに力をいれて診させてもらいますよ。誠心誠意ね。あなたの気持ちは痛いほどわかりますから。多いんですよ、亡くなったことに対する自分の無力感をどこにぶつけければいいのかわからず、医者に当り散らす人がね。まあ、あなたはとても理解のある人ですよ。どうかお気を落とさずに」

「べつにもう調べる気はありませんよ、ごたごたは勘弁ですから」

「そうでしょう、そうでしょう。だれも悪くない、それが真実です」

懸念が取り除かれたのか、とても晴れた表情で小菅を見送った。小菅は、そもそも病院に行く必要があったのだろうか、と考えるほ

どここのすべてを理解していた。その理解が、不思議と家内の死ぬ以前からあったようにさえ思えた。

家には戻らず、このまま駅前でタクシーを拾おうと思い歩いた。太陽がそろそろ青の頂点に達しそうで、汗をかくほど暑くなってきた。途中、通りにあつた冷房のきいた年季の入ってそうな洋食屋でポタージュスープを飲み、マグロのサラダを食べ、パンをかじった。いわゆるランチだ。薄いカーテンのかかった窓から外が見え、光は白い。ゆらめく黒い地面の上を歩く人は皆暑そうに顔をゆがめていた。食事を終え、アイスコーヒーを飲み煙草をくゆらせるふと、知っている顔が外を通り過ぎたように思えたけれど、だからといっていちいち確認する気はおきなかった。

勘定を済ませ、この店はいつかまた来よう、くつろげるいい店を見つけた、と小菅は店を出て看板の名前を覚えた。

緑があふれる公園の通りは、砂を踏む音が聞こえるほど静かで人々と植物の明るさに満ちていた。それは暑ささえ忘れさせてくれる。空を見ると小さな雲は照れたように他の雲の中にゆっくりと隠れた。家内の顔を見なくなり、小菅は黙ってロータリーを指摘した。

斎場に着くと、昨日のこともあって、どう顔を出すべきか、と入り口で躊躇した。しかし行かないわけにはいくまい、とリノリウムの廊下を少し行って、部屋をのぞいた。いたのは両親と義父母で、他にはおらず、四人は静かに別々に用事をしていた。用事なんてものはとくにはいはずだったのだけれど、手持ち無沙汰だったのかもしれない。母がすぐに気づき、「まあ」とわざとらしく驚いて見せた。

義父母にお辞儀をし、それから家内の顔をのぞこうと思っていたのに、なぜか気が失せた。たぶん、母らのせいだろう。

「みんなは？」

母にたずねる。

「食事よ」

「みんなで行かなかったのか」

「あたしはおにぎりです十分ですからね。まだ葬儀も済んでないんだから」

「そうか、そんなものなのか」

それから小菅は昨日のうちに準備していた喪服に着替え、鏡を見てネクタイを整えた。ふう、と深い嘆息が出る。顔が少し痩せて見えたけれど、喪服のせいにした。

ふと義母を見、話しておいたほうがいいだろうと思い、座布団に座ると、茶を淹れて出してくれた。

「頼子のことですが……」

「思い出ですか？ そうならやめてください。あたしにはあたしらの思い出がありますから」

「……そうですか」

喪服が小菅を少し感傷的にさせたのだろうか。彼女に思い出を語りたかった、自分がどれほど家内を愛していたかを知ってもらいたかった。そうすることでなぜか許してもらえようか気がしたのだ。しかし、聞きたくないという義母の言葉に助けられたような気がする。これは必要のないことなのだ。だから彼女も話さない。家内を一番愛していたのはこの人かもしれないのだ！

「余計なことでした」

「いえ、わかってもらえればいいのです」

沈んだままの表情で義母はいった。少ないまばたきは一定だった。

茶を飲み、それから煙草に火をつける。早くこの儀式のすべてが終わることを望んだ。

三時間ほどして娘が到着し、それに合わせるように面子がそろった。言葉はとくにだれとも交わさなかった。外には夜のとはりがようやくおり始めたようで、空気が澄んだようにも思える。やがて家内の唇を皆で濡らし、そのときに義妹と娘はまた涙したけれど、

それもすぐにおさまった。しばらくして退屈しのぎに表に出ると星がちらちらといくつか輝いていて、明日も晴れなのだろうと少し安堵した。

やがて豪華な僧侶が来、ぶつぶつと呟いた。小菅は聞いたことのある言葉が耳に入るたびに意識がそこに行き、どういった意味なのかしばらく考えさせることがなかあつた。娘をちらと見ると泣いてはいなかったけれど、愁いに沈んだままの顔で、来たときと同じだった。

一通りの流れが終わり、皆で食事をした。口当たりのいいものが多く、箸は進んだ。酒が入ったからか、一部でちよつとした笑いも起こり、子供の頃にいった葬式でもこんな光景があつたのを思い出した。

小菅はいつも線香を気にし、消えそうになるとなんども立てた。ようやく落ち着いて話ができるような気がして父に声をかける。

「最近、どうしてる？」

「ん？ ああ、なにもない。朝起きて、飯を食って、それから散歩してまた飯を食う。最後は寝るだけだ」

しわだらけの手を動かして話すその様は、とても耄碌しているとは思えず、母はもしかすると心配させるために嘘の手紙をよこしたのかもしれないと思えた。

「老いたと思ったが、元気なもんじゃないか、昨日にもっと話せればよかったな」

「退屈な毎日のどこにも話題なんてない。それに男は、いつ何時、どんなことが起ころうとも黙ってるもんだ」

「ああ、そういえばそうだったな（沈黙の度がすぎたのだろうか？ だから母や私は耄碌したと思ってしまったのかもかもしれない）。わかつてるよ」

部屋を見回すと、あれほど悲しんでいた義妹ですら頬を赤らめ酒に酔っていた。義兄の嫁はとにかく気取って見えた。母も混じり、その光景はただの談笑だった。こんなものだ、こんなものなのだ、

と小菅は納得し、缶コーヒーを買つと「夜は長い」と娘に一本渡した。

娘と二人で長い夜のあいだじゅう線香を絶やさずにいたけれど、会話という会話はなかった。考え事をしたり煙草を吸ったり、茶を飲んだりしているとやがて夜が白んできた。

「朝焼けを見ないか？」と娘をさそう。

「うん……」

表に出ると、青白い空を数羽の鳥が飛ぶのが見えた。太陽は山に隠れて見えず、少しの赤だけが場所を知らせている。清澄な風が肌をなでた。娘の髪がなびく。

「これから、どうするかな」

空を見ながらだと、絶対に落ち込まない。不思議と前向きになれる。だから娘にも空を見せたかった。返事はなかったけれど、顔には微かに光が戻つたようだった。

午前中に肅然と葬儀を終え、家内の回りに花を飾つた。棺が運び出され、火葬場へいく。到着すると、他にも同じような喪服の連中がいて、なんだか気恥ずかしさを感じた。最後に家内の顔を拝みやがて棺が窺にいれられ、これで家内の形もなくなるのだと思つた。そう考えると、なぜか不意に涙があふれそうになり、なにも見たくなくなつた。

待合で一時間と少し経つと、骨あげとなり、係がしきりにこれこれがどこの骨です、喉仏はこれですという説明をして、ここにいるほとんどは感心して聞いていた。もう、ただの物でしかないのかもしれない。

それから一緒に、少し遅い昼食をとろうということになったのだけれど、小菅は娘を連れて先に帰ることにした。両親もくるようにいつてみたけれど、向こうとの付き合いを重視するようだ。最後に義兄が、「しばらくのあいだは、ちよくちよく線香をあげにお邪

魔させてもらいますよ」といかにも無遠慮にいった。小菅の家からそれほど遠くないところに住んでいるからだろうと思いたい。それでも、「まだ先になりますか、墓でいいのでは？」と返すと、両方ですよ、と視線をはずさなかった。

今まで付き合いがまったくといていいほどなかったから、彼のことをわからなかった。しかし今はかなり反発しあう性格のような気がして、それは彼も気づいているだろう。つまり、苛々させたのかもしれない。嫌々ながらも、そうですか、いつでもどうぞ、と承諾し、一瞥すると小菅は背を向けた。両親の元へいくと、「ねえ、これからどうするんだい？ 生活は大丈夫なのかい？」と心配そうに問いかけてきた。

「わからない。でもまあ、なんとかなるとは思ってるよ」

「困ったらいつでも連絡するんだよ」

「そうだな、頼りにすることがあるかもしれない」

それから皆に軽く頭をさげ、骨壺を抱えながらタクシーに乗った。睡魔と揺れの心地よさがあつたので到着まで眠ろうとしたけれど、いろいろ疲れたのだろう娘が目を閉じていたので、眠ることはやめて外を見続けた。鳥は身を翻し、木々は葉を躍らせている。それもすぐに視界から消え、違うものが飛び込んでくる。景色に意味は見いださず、ただの色として感じるのみだった。

娘を起こし、家の鍵を開ける。仏壇を置くスペースを考えたり、遺品の整理をしたり、心はまだ落ち着きそうにもなかった。沈鬱なままの娘を少し気遣い、上の部屋で休むようにいった。

ひとまず整理を終え、軽く胃に食べものをいれた。そういったなんでもないふとした瞬間に家内を思い出すことがたびたびあった。そんなときは微笑して、自分を勇め、娘を育てるという責務を駆りたてた。それさえあればやっていけるはずなのだから。

翌朝、目元を腫らし、しかし眠たそうな気の抜けた顔を見せた娘を少し笑いながら学校へやったあと、挨拶回りをどうすべきか考えた。どの家を挨拶の境にするかということを考えて、小菅自身あまり付き合いもなかったものだから、どうでもよいような気さえした。ただ、畑中さんと古田さん、それに寄り合いに誘ってくれた木田原さんには挨拶しておこうと決め、陽もあがった頃にそれぞれを訪ねた。しかし、やはり古田さんがいいふらしたようで、とくに驚いた様子も見せずに「ご愁傷様です」とすまし顔でいった。おまけに、木田原さんの奥さんが寄り合いに是非としつこく誘ってきたので、よくわからないまま次回は出るということを承諾させられてしまったけれど、直前に断ればいいか、と考えた。

家に戻っても店を開けようという気がおきない。それはたんに疲れているからだろうと決め、そういえば店どころじゃない、整理をまだし終えていなかった、と電話をしたり書類を見たりし、様々な手続きをすべて終えた。人が一人死ぬということの意味を、この大変さをもって実感させようとしているのじゃないかとさえ思え、そうならば、うんざりという言葉で片付けたくなるほどだった。

昼前になぜか娘が帰ってきて、「学校はどうしたんだ」とたずねると、「テスト前だから早く終わるの」といった。そういえばそうだったと思い出し、叱ろうとした自分をほんの少し恥じた。以前にいった、「学校へいけ」という言葉の意味が伝わったのか、早くも洗濯をし、無表情ではあつたけれど、昼食まで作るといった。

「いや、ありがたいが、外に食へに行かないか？ 安くていい店をついこのあいだ見つけたんだよ。もちろん、勉強はそのあとにするんだぞ」

少し娘の出鼻を挫いたかもしれないなかつたけれど、外に出て気を晴らしてやりたいと思つたのだ。娘にどこまで家事をやらせるか、それも考えなければいけないと感じ、しかし絵を疎かにさせるようなことはしたくなく、じっくり話す必要もあり、それにはやはり外での食事が一番だとも思つた。

「着替えて準備ができたらいってくれ」

終始、娘の返事はなかつたものの、それは声に出して返事をしていいのかどうか迷っているようでもあり、喪に服しているつもりのようにさえ受け取れた。もしくは、悲劇の少女でも演じているのだろう。もちろん、それを問い詰めたり茶化したりする気はさらさらなく、快復を待つのみだつた。

娘はジーンズにキャミソールというシンプルな出で立ちで現れ、髪は後ろで束ねていた。小菅自身はある程度、服装に気を使つていて、「そんな格好やめてよ」などというありがちな台詞は一度もいわれたことがない。かといって、流行りやブランドなど知らず（そもそも一般的な中年に流行など無意味だとは思つただけれど）、しかし一応はカジュアルで無難な格好をしていた。

外に出ると、空がのしかかつてでもくるような暑さで、すぐに額に汗がにじんだ。煙草を吸うと、汗ばむ肌に煙がこびりつくような気がしてすぐに捨てた。

「あ、だめじゃない」

その娘の言葉に、小菅は、今まできちんと吸殻を始末していたのに、いつの間にか地面に捨てるようになっていたことを気づかされた。

「そうだったな、次からは気をつけるよ」

その行為は精神的な余裕の無さの現れかもしれないと思い、捨てたことを恥じ、踏みつぶした吸殻を拾い、通りで見つけたゴミ箱に捨てた。

店内に入るとすぐに、汗が日光を嫌う虫のようにさっと引き、快適な心地を味わえた。

「ふっ」

座るだけでそんな息を漏らすのは歳をとった証拠だろうか。

メニューを見ずに、今日はランチセットを頼み、娘も同じようにした。若いウエイトレスはお辞儀をして、それから店の雰囲気に合わせて振る舞いを演じているようだった。

「なあ、少しは元気出たか？ ほら、このままだとテストだって危ういんじゃないのか」

「うん……大丈夫。勉強はやってるから」

「この先、バイトはどうする。商売は続けるつもりだが、お前には家事もやってもらうつもりだし、絵だって描きたいだろう、食事についてはまあ、交代で作ろつじゃないか」

一息入れようと水を飲む。

「まだ考えられないわよ、昨日のことなのに」

「わかっているさ、悲しませるつもりはないんだよ。泣きたければ泣けばいい。けどね、なんともいうが、生きることが必要なんだから、嫌でも考えなきゃいけないんだ。それが母さんのためにもなるんだから」

そういえば納得してくれると思った。

「無理よ！ 父さんはやっぱり母さんのことを愛してなかったんだね……だから平気な顔をしていられるんだね。あたしはずっと見てた。無表情で冷血で、お金のことばかり考えてたんじゃないの？」

「そんなわけないだろう」

「だってそうじゃない、これからのことばかり考えて、お母さんが死んだこと、飼い犬が死んだくらいにしか思っていないでしょ？ 死んで喜んでるんじゃないの？」

娘は今にも泣きそうな顔を見せ、小菅はいわれたことに対して苛々とし、ここがどのような場所であろうともかまわずに頬をぶつた。我慢はできなかった。店内が一瞬静まり返り、こちらに視線が注がれたような気がした。手のひらが熱くなる。握りしめ、息を吐く。娘の顔を見ることはできず、小菅はただグラスだけを見た。

少しの沈黙が続いて、娘はなにもいわずに店を飛び出し、小菅は独り残された。周りの客から好奇の眼差しがちらちらと送られ、気にしないように黙ったまま煙草に火をつけた。ウエイトレスが遠慮がちに食事をテーブルに置く。小菅は心を鬼にしたつもりで未来の生活を考えた、苦勞が待つていようと、幸せになれるようやっつけていかなければと考えた、なのに、娘は悲しみの奴隷のように振舞った。父の顔さえ忘れるほど深く囚われている奴隷のように。小菅はこのとき、しばらく家に帰らずどこかをふらつきたい気分になった。そして、いったいどれほど考え続けていたのか、気づけばいつの間にか冷たくなっていった食事をほんの少しだけとり、店を出ると、空は小菅に激憤しているかのように赤く広がっていて、瞬間に恐れを感じた。瞬間で十分だった。

「私は帰らないのだ。あいつが理解するまで私は帰らないのだ」
ぶつぶつとこぼしながらおぼつかない足とりで空の重圧から逃れようとした。心が一瞬にして弱ったような気もし、しかしそれより恐怖が熱気とともに入り込んでくるような感覚があり、息をなんどもとめた。揺れる世界を泳いでいると、「小菅さん」と声がした。その声は犬を連れている木田原さんだった。

「あ、ああどうもこんにちは」
なんとなく救われたような気と、冷静になつていく心の鼓動を感じた。

「暑いですねえ。おや、酔っ払ってるんですか？　こんな時間に。まあ仕方ありませんよね、不幸があつたわけですから。酒に溺れたくなる気持ちはわかりますよ」

「いえ、まあそういうわけじゃないですが」
「隠す必要なんてありませんよ、だれだって酒飲みは同じ気持ちになりますからね。恥ずかしいことじゃありません」

それからすぐ、「へっへ」とか「おい」とかいいながら、暴れた犬を引いた。落ち着かせることもできず、すぐにまた口を開く。
「どうです、寄り合いもまだ先ですから、一緒に飲みませんか？

親近感が沸いちゃいましたよ。今の姿を見てね。今日は竹内さんと一緒にのむ予定がありましたね、いやはや彼はなかなか饒舌ですよ。お知り合いでしたかな？ 彼と飲めばいつも会話が弾みます。ね、たまにはすべてを忘れて飲み明かしましょうや。私くらいの歳になるとね、もうこれだけが楽しみですよ」

あまりにもなれなれしくあつたけれど、その勢いにのまれ、まあいいかもしれない、と約束を交わした。帰る気は正気を取り戻そうともなかったのだから、ちようどいいとさえ思った。

「それじゃあお邪魔させてもらいます。いつ、どこにいけばいいんですか？」

「そうですね、七時に家に来てくださいよ。そこから一緒にしましょう」

この人は年金生活だったかな、いやまだ早いだろう、と考えながら彼ののんびりと去る姿を見送る。犬の存在は彼には足かせでしかないようにも見えた。

家に帰らないとなると、なにかで時間をつぶさなくてはいけなくなった。小菅はひとまず小さな仏壇屋におもむき、一通り見る。どれも立派で重厚で、光沢の分だけ値が張っているようにも思えた。値札を見て悩んでいると店主が静かに話しかけてきたけれど、今すぐ買う気はまだなかったのですぐに店を出た。

あてもなくと歩いていると、娘が家について自分が家に帰らないということが滑稽に思え、決意した自分自身と娘の無理解に多少の苛つきを覚えた。それは暑さのせいもあつたかもしれない。

途中で見つけた書店で普段読もしない文庫本をタイトルだけで決めて買い、公園で読もうと考えた。しかし、太陽は真夏日が続く八月の予行演習でもしているかのようにぎらつき、頭を熱気で押さえつける。地面がゆらめいて悶えているようにすら見えた。数分も歩くと避難したくなる。別な喫茶店を見つけ、やれやれと汗をぬぐう。十分ほどくつろいで本を読んだつもりでいると、どうやらここは冷えすぎるといふことに気づいた。

ハンサムであることに自身をもっているかのような、しかしふて腐れている店員を呼び、「少し冷房を弱めてくれないか」と注文すると、無理っスね、と素っ気なく返された。頭にくるよりも、なぜ無理なのかということが気になり、問う。

「暑いからっスよ」

なるほどもつともだ。しかし、私は寒いから弱めてくれといったのに、見たところ体格も似たようなものなのに、長時間店内にいるのはウエイターのほうなのに、なぜ彼は暑いのだろう。小菅にはそれが気になって仕方がなく、客が多くて忙しいわけでもないのだから、きつとひねくれているのだろうと決めつけた。そしてそこでようやく頭に来、「他のお客が暑いといってるのか？ きみが暑いだけじゃないのか？」と訊いた。

「はい、俺が暑いっスよ。だから弱めません」

「なんだその態度は、客あつての商売じゃないのか」

「そんなことは知らないっスね。それは経営者側の問題じゃないっスか。俺はバイトなんだから、時給をもらっただけっスよ」

そういつて立ち去ろうとするのを小菅は引き止め、続ける。

「きみはどうも仕事とというものをわかってないな、店長を呼んで話をつける」

「あ、ああ、ちょっと待ってくださいよ。呼んだって進展しませんね。まあでも、そこまで怒るんだったら教えてあげますよ。実はこれだって立派な経営戦略らしいんっスよね。というのね、冷房をつけばなしにしてたらどうするかっつスよ」

「おいおい、きみのところはそういう汚い商売をしているのか」

「あ、気づいちゃいました？ そうなんっスよ、注文さえとればあとはさっさと追い出したほうが回転だつて速くなるし、お客さんがいなければいけないで楽ができるし。長々と婆さん連中のように新しく注文もせずに居座られるのは迷惑なだけなんっスよねー。うるさいし。まあ俺の考えじゃなく、そうやって教えられて、俺も楽がしたいから同意してるんっスけどね。まあお客は今、他にはいません

けど」

「そうか、わかった。それじゃあその店長を呼んでくれ」

「はあ？」

それは、なにもわかっていないじゃないか、と考えているのがひしひしと伝わる表情だ。

「呼ぶんだよ。いいから呼べよ」

ウェイターはあからさまな舌打ちをし、奥へと消えた。小菅はこのような商売に対する意識が、同じ商売人として許せず、一言いいなかった。

「はい、なんででしょう」

眼鏡をかけ、口ひげを蓄えた店主はまさにマスターそのもので、型にはまりすぎているようにも思え、おかしかった。

「ちよつとね、冷房を弱めてもらえませんか？」

「あ、はい。そんなことでしたか」

そういつて見える場所でスイッチをいじっていた。どういうことだろう、冷房が弱められた。したたかなのはあのウェイターだった。まんまとやられた気になり、羞恥と屈辱が同時に押し寄せた。しかしそんな気持ちも店主の心遣いで一気に吹っ飛んだのだった。それは、なんと、「お身体が冷えませんでしたか？」とホットコーヒーをサービスしてくれたのだ。ああ、これこそが商売ではないか！と小菅はほとほと感心し、常連にすらなってしまうかもしれない、とまで考えた。しかしそれはあのウェイターがいなくなればの話で、それでも、ここでの出来事は帳消しにはなった。ウェイターは何事もなかったかのように新しく入ってきた客から注文をとっていた。

読んだ本は推理もので文章が平易だったせいもあり、二時間ほどで結末を知ることができた。エピローグには殺人にまつわるドラマが描かれていて、殺人の中にも正義があり、そのためには一步を踏み越えてもいいのではないかという気さえした。小菅は余韻に浸り深く陶醉する。しかし、その最初の一步は法を犯す程度のものではなく、超越したなにかが必要なだろう。そうでなくては正義

が陳腐化する。だから犯人は裁かれたはずで、やはり世の中はよくできている。殺人なんて考えたこともなかったのに、本というのは面白い。例えば、どんな殺人が許される？ あのウエイターを醜悪だといって殺すことは許されるのか、人ごみの中に飛び降り自殺しようとする者を屋上で殴り殺すのは許されるのか、偽善はどうだ、駄目だ、どれも弱い。クーデターが成功すれば許されるかもしれない。それと、戦争の勝者、いや、兵士か。負ければ他国の法で裁かれるのか？ 自国だとしたら皮肉なものだ。ああどうも飛躍しているような気がする。読んだ小説はたんなる愛憎劇だったのだから。小菅は自嘲し、殺人など、法で認められてもやりたくないものだな、と考えた。

こういった読後感を味わえるのなら、また読書を再開するのもいいかもしれない、と思い、中学生時代以来だなど考えながら再度、書店に足を運び、同じ作家の本とオススメと書かれている作家の厚みのある本を購入した。左手の手さげ袋に三冊の本。陽は小菅を真正面から睨む高さにまで落ちていたけれど、しばらく歩いているとまた汗が流れて家に帰りたくなった。でも帰らない。そうやって固執している自分に嫌悪を感じ、疲労も押し寄せてきた。まるで家出少年だ、と口元が歪んだ。

人通りのない路地をいき、前から長い影が足元をなでるたびに娘の姿を思い出さされ、それが家内を思うことにつながり、人から遠ざかりたくなった。目的がなく、ただ歩いているだけで、しかし足は止まらない。意志とは無関係に流れている。風に運ばれる紙切れのように。

しばらくして通りに出ると、どこか店に入りたくなったのだけれど、きつかけがなぜかつかめなくなった。窓から中が見えるたびに躊躇する。自分がなにをしているのか理解できない。ふらふらと流されているうちに、気づけば家の近所だった。時計を見ると三十分ほどで七時になる。少し早いと思ったけれど、本を家の郵便受けに隠し、木田原さんをたずねることにした。

ベルを鳴らそうとしたちようどそのとき、木田原さんが横から走ってくるのが見え、釦から指を離した。息を切らしながら、「ああ危なかつた。妻にバレたらえらいことですよ」といった。

「あ、そうなんですか、押す寸前でしたよ。いつも黙って出かけるんです?」

「ええ、しよつちゆうですよ」

「しかし、黙つたまま夜遅く帰れば詰問されませんか?」

「まあそれはいいんですよ。楽しんだあとだから。やっちまったもんは仕方がないでしょう?」

「はあ、まあそうですね」

「そういうことですよ。それに、会話だつてほとんどありやしませんがね。すぐ支度するんで待つててください」

きつと、奥さんは呆れているのだらうと思つた。そうでなければ、常習性を思わせる彼をなんとかしてでも引き止めるはずなのだから。

木田原さんはすぐに出てきた。いったいなんの支度があつたのか不思議なくらい容貌に変化もなく、ならば金銭的なものだらうと片付けた。

「さあいきましよう、竹内さんとは店で合流しますから。ちよつと歩きますけどね、それはまあ、一応の用心で、家内に引き戻されなように遠くへいくまでです」

なるほど、と少しばかり感心した。いつも家で飲んでいた小菅には、そういう酒飲みのちよつとした知恵が楽しく思えたのだ。

二人で同じように煙草を吸いながら、黙つて歩く。黄昏を墨汁で塗りつぶしたような空になつた頃、ようやく涼気が舞い降りたような気がして、腕をさすつた。薄く輝き出した星が綺麗だった。しばらく上を見ていたせいで気づかなかつただけれど、眼下で月が揺れている。いや、それは闇にきらめく木田原さんの頭だった。ちよつどいい具合に黒と白の雲がかかっている、でこぼこの黄色い月だった。空を見れば彼の頭が視界の端で月になるとは知らなかつた。虫が一匹彼の頭の上を回つた。手で頭も叩くようにぺちぺちと振り

払い、それからこちらを見て笑った。小菅も同じように笑った。

案内された店は多少古ぼけたたたずまいで、常連がそこそ多い、と木田原さんはいった。入ると、四十代前半に見える楚々とした雰囲気、女将が、前に座る男の客に酒をついでいた。店は狭く、カウンター席が八つしかない。テレビに映っている野球中継を見ながら男は静かに酒をあおった。

「よう、ママ。こいつは昨日奥さんを亡くしてね。よくしてやってくれよ。そうそう、竹内もあとからくる」

こいつといわれたことを女将に会釈してから気づいた。しかし、酒飲みの付き合いとはそういうものなのかもしれないと思い、忘れることにした。しかしそれもあとになって、彼がわざと、女将の前だから居丈高に振舞っているのだとわかった。きつと気に入っているのだろう。

竹内さんがくるまで瓶ビールで軽く一杯やり、鳥を食べた。席四つ隣の男はその間も喋らず、酒がなくなれば黙ってコップを女将に差し出した。

「実はね、私は二度目の結婚でして、ずいぶん昔に別れたんですよ。私が悪いですかね、逃げられたとわかって探し疲れて、それからしばらくは酒に溺れる日々が続いたんです。逃げられた原因もまあ酒なんですかね、ははは」

「それは知りませんでした」

「知らない人のほうが多いでしょうなあ。こうやって自分のことをさらけ出すのはね、あなたのことを知りたいと思っただからですよ。奥さんに先立たれても顔色一つ変わっていない。おや失礼。もちろん、それは私の判断ですがね、いったいこの先どうやって生きるのか、興味があるんです」

「顔色ですか。ただ、それどころじゃないっていったらどうです。冷血ですか？ 今まであった生活ががらりと変わるわけです。木田原さんは酒に溺れたのでしょうか、私には娘がいて、あいつに絵の勉強をさせてやりたい。だから立ち止まれないんですよ。立ち止ま

れば私と娘は酒ではなく涙に溺れて死ぬでしょう」

「ほう、涙にですか。しかし複雑なところですね。すでに小菅さん、あなたが奥さんを亡くされたという挨拶をしていない家々の奥さん連中の中から、礼儀知らずだとか変わり者だとか陰口を叩く人らが出てくるそうですよ。死んだとか、結婚だとか、そういう話題はすぐに近所中に回るものです」

「そうですか、それは驚きですね。しかし、もともと私はほとんど付き合いもなかったわけですから、どうでもいいことですよ。なにも近所の陰口を叩く人らが客のすべてではないんですからね」

「駄目だ駄目だ、それじゃあ駄目です。すでに私は聞いてしまいました。それどころじゃないという言葉。もちろん、しらふのときには口を閉ざしてだれにもいいやしませんよ。でもね、酒が入ると自信はありません。家内とは会話しませんが、きつと寄り合いでいいふらしてしまうでしょう。そうなれば、男連中がそれぞれの妻にいい、そこからまたよからぬ噂がたちますよ。そうなれば、冷血どころじゃない。あの人は妻を殺した、なんてことにだってなり得ますとも」

「それは……いくらなんでも大袈裟じゃないですか？」

小菅は小さく笑った。

「いいえ、女とはそういうものです。どこかおかしい、違うとわかっただけでも、そういう噂を楽しむ生き物です」

「それじゃあ、そうやって心配してくれるのですから、木田原さんがいわなければいい話じゃないですか。私はもしそんなことが吹聴されれば、一番楽しんでるのは木田原さんと思ってしまうですよ。そうなれば、私はあなたを殴ることになるかもしれません」

木田原さんの目をじっと見つめていった。

「おお、怖い。しかしもつともですね。そのとおりです。わかりました、私が気をつけますとも。そしてこの話はなかったことにしましょう。さあ、ママ、こいつについてやってくれ」

小菅は、余計なことを語らないように、あまり酒を頭にめぐらせ

るわけにはいかない、とグラスを傾けながらも気を張った。

「まあね、嘘でもいいから表に張り紙をして、しばらく喪に服しているふりでもしたほうがいいかもしれません。それだけできつと世間は納得しますよ」

「休むという張り紙はしたんですが、そんなものですかね」

「ほう、そうですか、ではさらに念を押すといい。やつらは単細胞ですからな。それに、張り紙をすれば、もし私が口を滑らしたとしても、妻殺しに関してはきつと、私が嘘をいつているということになるでしょう。演じることはなんにせよ必要ですよ、私は下手糞ですけどね」

「そうですね、そうします」

「そうそう、ママも実は亭主を亡くされていてね、四年前だったかな？ そのときすでに私は常連でね、気丈に振る舞って仕事を続けていた姿を今でも覚えていますよ。いやあ色っぽかったね。守つてやりたいと思わせてくれましたよ」

奥の客に酒を注ぐ女将を見ながらいう。

「気丈……ですか。今の私も、いわばそうですね。まったく同じですとも。そうやって自分に酔うつもりはありませんが、娘は理解してくれない。冷たい、とそういうんです」

「子供はずうつといませんがね、そういうものかもしれないなあ。とくに娘さんにとっては母ですから。愛した人の死を、なぜ父さんはなんとも思っていないの？ とかそんなことを考えてるんじゃないですかね。ありきたりな想像ですがね」

「いえ、案外そのとおりかもしれませんよ。もし私が娘の立場だったら、話すことがなければ、どこか、ほんのちよつとした仕草にでも悲しみのサインを見つけようと思いますね。でも、あいつには確信持てるものを見つけられなかったのでしょうか。それが、つまりはあいつの中で父は冷血で冷淡だと決めつけることになったのかもしれない」

「なるほど、面白いですな。ならばちよつと見せてやれば済むこと

なのでしょう。演じればいいんですよ」

グラスを一気にかけて気持ち良さそうに息を吐いた。

「ところで小菅さん。人は死んだらどうなると思いますか？」

「どうなるものにも、死ねば終わりでしょう。地獄や天国なんてあるとは思えませんよ」

「寂しいですなあ。もつとこう、夢のある話をしましよや。ある人はいつてましたよ、死こそは魂の解放だと」

両手を広げてさも楽しげにいった。

「解放ですか。その人は憧れてるだけなんじゃないですかね？ 解放の意味が幸福と同じものをいつているのなら、自殺でもすればいいと思いますか？」

「おお怖い！」

少し酔ってきているのだろう、大きく開かれた眼は血走っていた。

「木田原さん自身はどうなんです、なんとお考えで？」

「私はねえ、小さい頃にそれを考えたことがありましてね、半ばパニックに陥ったんですよ。恐怖でね。考えたのが布団の中で、すぐに飛び起きて親父のところへ飛んでいったんです。すると鉄拳をもらいましてね、眼が覚めたんですよ。そのときに、ああこういうことは考えてはいけないのだ、だから親父は殴ったのだと気づきましたよ。のちのち、殴った理由が、なんとなく鬱陶しかったからと知ったときはショックでしたが。でもね、今は恐怖に負けずに考えることもできますよ。私の答えは一つです。やはり解放という言葉を通じてますねえ。だって、そうじゃなきゃつまらんでしょう。べつに死にたいとも思いませんがその先にはなにかあつて欲しいと思いませんか？ そうじゃないと人はなんのために生きているのかってことですよ」

「まったく同じじゃないですか。私もね、人は死ねばそれで終わりののに、なぜ生きてるのだろうってね」

「ニヒルですなあ。それこそ死ねばいいという言葉が当てはまりませんよ。まあここであなたはなんのために生きているのか、と訊くの

は簡単ですからやめておきますがね。そんなのはなぜ一人一人生まれてきたのかを訊くと同じようなものですから」

「はは。これからはまあ、娘と小さな幸せを探して生きるのみです」
「私は極楽でも探しましよかねえ、ははは」

ちようどそこに入ってきた長身のスーツ姿の客がどうやら竹内さんらしく、白い頭をふわりと七三に分け、表情は威厳を含んでいて、この店には不釣合いに思えた。

「近所に住んでいるのに初対面同士とは驚きですな」と木田原さんがいった。「こいつはね、一見紳士だが、仕事は詐欺師でねえ。いつも女を騙して金をまき上げて、今までいったいどれほどの女が泣いたことが」

「はっ、騙されるほうが悪いのさ。といっても正確には詐欺師ではないけどね。それに、ターゲットは虚飾と虚栄心のまじった汚らしい女ばかりさ。だからママみたいな女性は狙わないよ」と女将のほうに微笑んだ。

「あら、そうやって女性を落としていくのでしょうか？」と彼女はしなやかに流した。

「あはは、そのとおりだ！」と豪快に木田原さんが笑う。竹内さんは詰まらなそうに頬をゆがめ、焼酎を頼んだ。

「それはそうと竹内よ、こいつは先日奥さんを亡くされてね、なにか元気づけてやってくれないか」

また彼はいいふらす。こうやってだれかれかまわず人の不幸をネタに酒を飲むデリカシーのない人だったのかと思わずにはいられなかった。しかし考えるに、そもそも木田原さんは悲しみを忘れるために誘ってくれたはずで、そうなのだからやはり皆がその悲しみを知らずにいるのはよくないのだろう。議題がなければ目的の討論ができないのだから。

「そうですか、それは残念ですね。しかしまあ、どれほど悲しんだところで、人は無情ですよ。いずれ忘れます」

「ええ、おっしゃる通りです。しかし、あまりにも早く忘れようと

すると、どうやら非難すらされるようです」

「そうでしょうね。自然に、自分に忠実であるべきですよ。無理しないことです。放っておいてもいずれ忘れるんだから。きつと、どう非難されてもあなたの奥さんですから世間以上に早く忘れるなんてことはないですよ。だから、どちらにせよ気にしないことですね」

「ええ」

「それに、忘れたいのなら、この話はしないことです。そちらの事情はわかりませんが、もっと違う話をしませんか？ 例えばほら、株はどうです？ されますか？」

「いえ……」

「株なんて私だってやらないね。たとえ買っても置いてるだけだな。そんな難しい話じゃなくて、いつもあんたいってるじゃないか、人間がどうのだから、下賤な女を地獄に落としてやったとか」

「おいおい、イメージが悪くなるじゃないか、初対面なのに。しかし、地獄に落ちるべき人間という点でなら話はできそうですが、いかがです？」

「なんだか過激ですね」

グラスを握る小菅たちに挟まれた木田原さんはいろいろと女将に注文をしていた。

「そうですね、表現の問題でしょうか」

「私は地獄なんて信じてませんから」

「おや、それじゃあ話ができません。いい大人が、そんなところを突っ込んでくるとは思いもしませんでしたよ、はは」

「ええ、ですからやめましょうよ」

「ふう。腰砕けですね」

「すみません」

「まあいいですとも」手のひらを向けていった。「ならばこういうのはどうです？」声を細めていう。「その男が、なにを生業にしているか当たるといふのは？ つまりゲームですよ」

「答えはどうやって確かめるんです？」

「あの飲みかたからして、常連でしょう」

「ああ、よく見るとも」木田原さんが口を挟む。

「つまり、女将が知っている」

なるほど、と小菅たちは納得した。そこでそれぞれ推理をはじめ、横目でちらちらと彼のなりを確認し、小菅は大工と決めた。顔が黒く、容貌魁偉でもあったからだ。

木田原さんはトラックの運転手といい、竹内さんはプロレスラーといった。

「それはなんでも確立が低いだろう」と木田原さんが笑う。小菅も同じ考えだった。

「確率論なんてつまりは曖昧さ。重要なのは結果なんだから」

「ふん、強気だな」

そこで木田原さんが女将に聞いた。「えっ？」と彼女は小菅たちがそんなゲームをしたことが意外だったようで、しかし、答えを教えてくれた。

「あのお客さん、いつも黙ったままなのよ。返事をするにはあるんだけど」とそこまで小声でいったとき、その客がこちらを振り返った。確かに、三人の客と女将が小声でひそひそと話していれば怪しげだし、気になるだろう。女将は姿勢を正し、なんだか気まずい空気になった。会話がとまる。テレビのコマーシャルの音だけがあつた。まったく浅はかじゃないか、人のことを話の種にするなんてと小菅は自己嫌悪し左腕の肘を突いて手のひらで横顔を隠し、嘆息した。途端に客が立ち上がり、絡まれるのかと思っただけで、何事もなく勘定を済ませて出ていった。小菅は心底ほっとしていた。

私も私だが、あの人もあの人だ、と小菅は竹内さんの軽薄さと人間性を軽んじた。それもすべて、このすべては酒のせいなのだろう、ということにした。

それから店の空気も元に戻り、たあいな会話が続いた。討論もなく、酒も進み、いつしか気を張ることも忘れていた。たまに笑いが起こり、木田原さんがとくに女将を美人だといって褒めた。あと

から客も入って来、店内はいつそうにぎやかさを増した。確かに竹内さんは饒舌だったけれど、言葉の端々に気取りがあつて、いけ好かない中年だった。木田原さんがいなければ酒もまずくなつただろう。そういつた点でいえば、木田原さんはまさに酒飲み男の典型のようで、がさつで利己主義で世間ずれしていない部分もあるけれど、子どものように素直なのだ と理解した。

竹内さんがすべて勘定をしてくれ、小菅は素直に甘えた。近所なのだから一緒に帰るのが自然だったのだらうけれど、小菅は寄るところがある、と行って二人と別れた。寄るところがあるのでなく、今、帰るところがないだけなのだけれど。

さてと、どこへいくかな。小菅はそう呟き静かな路地を歩いた。街頭だけが灯つていて、塀のせいで家々の明かりは路上に届かず、猫が走り去るのを見た途端に心細くなつた。時間を確認するとまだ九時すぎだ。少しいくと理解した。後ろから足音が聞こえ、だれかつけてきているということ。振り返ると、二十メートルほど離れた場所にシルエツトがあつた。小菅はあの店の男に違いないと決めつけ、なんとなく暴れたい気分もあつた自分に気づいた。面白い。ゆつくりと、静かで暗い場所を探して歩く。酔いはすぐに飛んだ。確実に男はつけてきていた。住宅街を離れ、林道の手前で立ち止まる。月明かりがかすかに落ちるも、そばにくるまで男の表情はわからなかつた。

「なあ、あんた。店でなにをひそひそ話してたんだ？」

彫りの深い顔の男はじつと睨み続けた。沈んだ目に光が漂っている。歳は同じくらいだろうけれど、体格では明らかに相手が勝っていた。

「なんのことです？」

小菅は嬉しさを頬を緩ませる。

「おいおい、とぼけるなよ。俺のことをいつてたろう。あからさまなんだよ。喧嘩売ってんのか？」

「なるほど、それで一人になった私のほうをつけてきたというわけ

ですか」

「何人いようが関係ねえよ」

「で、どうしたいんです。喧嘩ですか？ 金ですか？ それともただ、話をしたいだけですか？」

「ふん。こうするんだよ！」

男は腕を振り上げ小菅に殴りかかった。拳は左頬をとらえ、頭を揺らす。一撃は強烈だった。しかし痛みはなく、頭の中では「この程度なのか？」と冷静に考えていた。さらに男はもう一発放つ。やはり痛みはなかったけれど、それは小菅を地面に跪かせる衝撃があった。最後に正拳突きが鼻をとらえ、倒れるのと同時に血の温かさを味わった。

「今度あの店でお前の仲間を見つけたら、そいつらも同じようにしてやると伝えておけ！」

口も切れたようでも倒れたまま唾を吐く。生ぬるい感触が喉を伝う。上半身を起こし、手で血を拭き取り、なんども唾を吐いた。それからもう一度、土に寝転がり空を見た。気分はなぜか晴れていて、次第に笑いが込み上げた。それは大きく、あたりに響き、やまなかった。雲から顔を出した金色の月が、光をにじませ怪しげだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2870x/>

囚

2011年12月18日17時48分発行